
竜と行商人

砂漠の蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と行商人

【Nコード】

N6499N

【作者名】

砂漠の蜻蛉

【あらすじ】

私の名前はアスラ・アビロート。行商人だ。

我々は、港町、ミロンへ毛皮を売りに来た。

その街で大規模な銀貨取引を持ちかけられた。

だがその話は嘘で我々はその裏を突くために、ラドン商会へ話を持ちかけたのだが……

その支店長は何故か丸淵眼鏡だった。

違ーう！
そこじゃないだろ！

？
(前書き)

このネタ元は『狼と香辛料』です

？

空はぬけるような青。風は深緑の匂いが立ち込める。
ここは、東の山を越える少し前に在る村、ヒクラン。見渡す限りの平原にぼつぽつと建物が存在している。

「それでは、よろしくお願いします。アスラさん」

「いいえ。こんなに上質な毛皮ならかなりの高値で売れますよ。」

すつと手を差し出した村長の手を握り返す。
握手は、契約の成立を意味していた。

「特に、今年は豊作ですしね」

アスラは、にっこりと笑って返した。

「そうだ、ナントは居ますか？ 久し振りに酒を酌み交わしたいもので」

そう言うつと、村長は困ったような顔をした。

アスラは商売用の笑顔をつくる。

「どうかされましたか？」

「ナントは、狩りに行ってしまつての。それに……」

村長が口を開きかけた時、「出たぞ！」と大きな声が聞こえた。
声の方を見ると、大きな鹿の角を抱えて飛び出して来たのはナントだ。その後からは何人もの狩人が追いかけて来る。

それぞれ「逃がすな!」「イアヌが逃げるぞ!」と叫びながら走っていく。

それを見たアスラは肩を竦めた。

「ナントが、今年のイアヌですか。酒でも飲み交わそうと思ったんですが仕方ありませんね」

アスラはそう言って、毛皮を満載にした荷馬車に飛び乗った。

「では、また来ます」

「ああ。待ってくれ」

パタパタと村長の孫達が走って来る。

「これを持っていってくれ」

孫達を抱き上げ、その子達が持って来た干し肉を差し出す。それを見たアスラは無性に寂しくなった。

行商生活は、取引以外は殆どが愛馬と一緒に。それに、馬は意外と冷たい。

「……ありがとうございます」

アスラは、干し肉が山ほど入った籠も荷馬車に積み込むと、村を後にした。

アスラは貰った干し肉をくわえた。

グレイシアのアスラは、十八の時から七年間。ずっと馬車の上だ。駆け出しの時はまだ良かったが、次第に孤独という重荷が見に染みてきた。

以前、宿で出逢った美しい女性に振られてから、更に溜め息が増えた。

「お前が喋ってくれたらな……」

アスラは、馬の方を見た。

そして、喋ったらきつと賃金を取られるだろうと思い直し、「喋らない事が馬の美点だな」と呟いた。

川沿いの道をのんびりと進んでいく。

途中、ガタンと馬車が揺れたが、石にでも乗り上げたのだろう。

と気にせず、適当な空き地まで着く頃には日が沈み辺りは薄闇に包まれていた。

御者台の下にある引き出しから桶を出し水を汲み、愛馬に水と人参を食べさせた。

自分は干し肉をもう一つ銜え、「お前との野宿も七年目だな」と一撫でしてやった。

「ふむ。之からも宜しく頼むぞ。あるじ殿」

突然の声に馬が喋ったと思い、バツと身構えた。が、声は馬からではなかった。その奥、荷台の方から聞こえてくる。

「くふ。良い夜じゃ。酒は無いかの」

恐る恐る、荷馬車の上に掛けた布を持ち上げる。
すると突然、布が跳ね上がり地面に落ちた。

「おや。干し肉」

ひょいとアスラの銜えている干し肉を引ったくり、鋭そうな牙を見せ付けるようにそれを銜える。

「ん？　ぬしよ。どうかされたか？」

アスラは開いた口が塞が二度と戻らないかと思った。
緑色の竜。この辺りではまず見る事がないフライゴンが、器用に自分に掛けた毛皮を落とさない様にして首を向けた。

？

「ふむ。やはり酒があるとよいのじゃが」

アスラは、暫く呆然としていたがハツと我に帰り、銀のナイフを抜いた。

「そんな物は無い」

「何じゃ。ぬし、ご機嫌斜めじゃな」

フライゴンはケラケラ笑っている。

「お前は、誰だ」

「ふむ。そういえば名を名乗っておらんかったの」

そう言つてゆつくりと体を起こした。

そこで目に飛び込んで来た物に対する驚きは一生忘れないだろう。

「私は、イアヌ。北の氷龍^{ひつりゅう}イアヌとは他ならぬ私の事じゃ」

はらりと落ちた毛皮の下から出て来たのは、どう見ても普通ではない。

イアヌと名乗るフライゴンが腰に手を当て、背中越しに此方を見てくる。

その右腕には細長く紺碧の色をした鱗が何枚も着いていた。それを見てすぐに思いつく言葉、悪魔憑き。そしてすぐに気が狂っているんだと思い直した。

「イアヌはこの先の村の狩りの神の名だ」

「ほう。私は、自分以外にイアヌと名乗っておる者は知らぬが」

アスラは、切っ先をぶらさずに言った。

「そうだとしたら、俺に証拠を見せてみる。何かしらの化身ならたやすい事だろ」

言い終わったところで、様子を見てみると、あからさまに嫌な顔をされた。

「ぬしが言いたい事はわかりんす。じゃが、嫌じゃ」

そう言うのと、再び毛皮に潜り込んでしまった。

こうなったら取って置きの一言を言うしかない。

「この辺りに教会がある」

ピクツと竜の尻尾が動いた。

「悪魔憑きは災いの元だからな。俺としてもさっさと教会に受け渡して早く旅に戻りたい。だが、本当にイアヌなのなら考え直すかもしれない。動物の化身は幸運を招いてくれるからな」

「見たいのかや」

竜はギラリと牙を向けた。

「当たり前だ」

アスラは手のひらを上に向けた。

「だったら、その震える手を如何にかしんす」

アスラは、チラリと自分の手を見て、それが嘘だと気付き顔を赤くした。

「まあ、教会には何度か酷い目にあつておる。じゃから、どうしても突き出すと言つのなら見せぬ事もありんせんが、生血が必要じゃが」

竜の目に、冗談だろと言つてやったが、竜の機嫌が少し悪くなつたようだ。

竜はそんなアスラを無視して足元に転がっている剣を拾った。アスラはさらに驚いたが、商人の意地で顔には出さなかった。

その剣は、ヒ克蘭にある筈のイアヌが宿つていると言つ剣だ。確りと祭られている筈のそれがここにあつた。

「ぬしは、これを見た事があるのかや」

竜が、剣を鞘から引き抜く。

片手片刃の群青の刀身に星の光が瞬く。

「ぬしの考えておる事は大体分かる。盗んできたとしても言いたいんじゃないろ。じゃがこれは、元々私のじゃ。じゃから、これが使えれば問題なかるう」

竜は、剣を持っている右腕をピンと横に伸ばした。

「これでよかるう?」

その切っ先から、氷が竜の右腕から胸、脇腹を覆うように張っていく。

「なっ」

「くふ。面白い反応じゃな。触ってもよいぞ」

差し出した腕は氷で鋭く尖った刺がキラキラと光っている。元々鋭そうな爪は、氷でさらに鋭く、触っただけで切れそうだ。さらに、右の翼の下半分には菱形の真つ白な氷が三つ下がっている。こちらもどんなに磨いだ刀よりよく切れそうだ。

「なんじゃ。臆したかや」

「そんな事はない」

アスラは、手を伸ばした。

「あ」

「何だ」

「そつと、の」

アスラは、その言葉に顔を真つ赤にした。竜はくふふと空いている方の手で口を押さえ笑っている。

アスラは、その言葉を見殺しして乱暴に触った。

冷たい。本物の氷だ。

「分かった。お前の事は信じるよ。お前は、確かに狩りの神イアヌだな」

「くふ。神かや。私は神なんて立派なもんじゃありません。氷龍イアヌ。誇り高き龍じゃ」

イアヌは剣を戻し、胸を張った。
如何いう訳か、神と言われるのは嫌らしい。

「で、お前、行く宛てはあるのか？」

「ぬ？」

「ヒクランの村から出てきて、その後は如何するんだ？」

イアヌは、顔を少し背けた。
その目は、悲劇を語る詩人の様だ。

「私は、行く当てがありません。だから、ぬしがよいと言ってくれるのなら、私はぬしと旅がしたいんじゃないが。」

イアヌは必死だ。
もしかしたら、商人よりも他人の心を掴むのが上手いかもしれない。
い。

「ぬしは、旅から旅の行商人じゃ。駄目かや？」

そんな物をねだるような目で見られれば、断れるわけがない。

そんな、目で……

「まあ、仕方ない。今夜はここに居ろ、だが……」

アスラが顔を上げたその時には既にイアヌは毛皮に包まって荷台に寝そべっていた。

アスラは荷台に上り、イアヌを隅に転がす。

「俺も寝るんだ。少しよれ」

アスラは、毛皮を半分ひったくりその中に潜った。

アスラは寝ながらイアヌを連れて行ったことによる損得勘定を始めたが必要は無かった。

朝起きて、あいつが商品ごと居なくなっていなければ。

？

陽射しがアスラの顔を照らし出す。

アスラは、目を開けた。そして、ふと横を見る。
いない。やられた。

「ぬしよ。やっと起きたかや」

ビクツと天に目を向けると、イアヌの顔がすぐ近くにあった。
その時、初めて角の色が青いことに気が付いた。

「な、な、な、な」

「何じゃ？　ぬし、惚れたかや」

「そんなわけ……」

アスラは顔をそらした。

昨日、あんな顔をされたら惚れるなというほうが無理な話だ。ましてや、滅多に人と触れ合わない行商人だ。

「くふ。やはり、雄共は皆たわけじゃな。まあ、私もその一員なんじゃが」

「え？」

「何じゃ？」

イアヌの、口元を押さえるように笑う仕草や、喋り方は女の様だ

った。

「ぬしも、あらかた私を雌だと思っていたのじゃろ」

イアヌにぴつたりと言い当てられ目が泳ぎそうになった。

「くふ。このような喋りがぬしらは好み何じゃろ。お陰で、旅をしていた時に困らぬかった」

イアヌは腰に片手を当てて、アスラに向き直った。

「私が、雄だと分かったときの反応も面白いからの」

アスラは、こめかみに手を当てた。

確かにそうかもしれない。が、イアヌの目的は多分後者の方が強いだろう。

まったく、ずるい。

ふと、目を上げると、イアヌが腰帯を着けていることに気が付いた。

紅く染めた皮で作られた一級品だ。

「お前……それ……」

「ん？」

イアヌは、これか、と言うように一回転してみせた。背中側には、昨夜の剣が挟んである。

「少し小さいが、まあ何とかいけるじゃろ？」

「そうじゃなくて、それは俺の一張羅の帯だ」

イアヌの顔を見てはつきりと言ってやると、イアヌは、ふふ、と笑った。

「流石は商人じゃな。自分の表情がどの様に映るか知っておる」

一応、褒められていると思っておこう。

「しかしだな」

アスラはイアヌの右腕を見た。

そこには明らかに異様な紺碧の鱗。そして、物騒な剣。こんな姿で街に入ったら大変な事になる。アスラにとって街に入れない事は商人生命の危機だ。

「その姿で街に入られると困るんだ。これを着ける」

瀬に腹は変えられない。売る筈だった高級ローブと適当な布ををイアヌに投げた。

ローブは勿論だが、この布も売ればリンド銀貨百枚くらいの値になる。

その言葉と物にイアヌは目を輝かせた。

「よいのかや」

「ああ、これも何かの縁だ」

「うむ。えーっと」

「アスラ・アビロート。アスラで通っている」

「うむ。ぬしの名は、詠嘆に語り継いでやろう」

伸ばしたアスラの手を確りと握る手は、狩りの神とは程遠く暖かい温もりを感じた。

何処までが本当なんだか。

でも、あながち本気なのかもしれない。

ばさりと、ローブを羽織り、布を手早く巻きつけ鱗を隠す。以前にも、同じことをやった事があるのだろうか。

「あ」

「ん？」

「取り合えず、もうすぐ雨が降る」

「な！？ そいういことは先に言え」

アスラは手早く荷を纏めると、御者台に飛び乗った。イアヌもその横に座る。

一人では寒い御者台の上も二人なら温かった。

？
(前書き)

商人アスラと異郷の神イアヌが辿り着いたのは……

？

イアヌがガサゴソとローブを外し頭の上に被せると、見計らったように雨が降り出した。

雨はあつという間に土砂降りになり何もしていないアスラはびしょ濡れになってしまった。

「雨雲に追いつかれたな。もうすぐで顔見知りの木賃宿につくんだが」

アスラはイアヌの顔をちらりと見た。

そして、ローブが開けないように、しっかりと留める。

勿論、突然ローブを取られたイアヌは頭からびしょ濡れになった。イアヌは恨めしい目を向けたが、アスラが指差す方をみて、薄笑みを浮かべた。

「ぬしのお手並み拝見じゃな」

木々の隙間から、天に伸びる三角屋根の中に金属の鐘がぶら下がっている。教会だ。

「途中、ご覧の通り雨に降られましてね」

教会に着いて第一声がこれだ。

教会には、こういう旅人が泊まれるように部屋がいくつかある。とても立派とは言えないが、屋根の無い中荷馬車で寝るよりは幾

分ました。

「それは、それは。どうぞ、暖炉に火も入っておりますので」

修道士は、ちらりと隣にいるイアヌを見た。

「私の連れですが、腕に酷い傷がありましてね、見られるのを嫌がるんです。無礼をお許し下さい」

修道士は、イアヌを巡礼中の修道士か、修道女だと思つたらしい。イアヌが物静かな女のような仕種をしたので恐らく後者だろう。

「分かりました。幸い、他と離れた部屋が空いていますのでそこを使つと良いでしょう」

「神に感謝いたします」

アスラは、馬車を進め、教会の敷地内へ足を運んだ。

イアヌを先に行かせ、自分は荷台に掛けた油を染み込ませた布の上に溜まった雨水を流す。

毛皮は、無事のようなだ。

その点にはホッとして教会に桶を借りてイアヌのいるはずの部屋へ向かった。

教会が用意した部屋は、一番奥。他とかなり離れているのでアスラにとっては好都合だ。なぜなら異教の神が一緒なのだ。

もし、見つかったらただではすまない。

「俺だ、入るぞ」

ボロボロの戸を叩くと中から「うむ」という声がしたので戸を押し開けた。

「ふふ。私の傷、冷たい雨で洗ったほうがよいの」

イアヌは、ニヤニヤと笑った。

「私には考えられぬの。腕に傷かや」

「毛皮は無事だったよ」

アスラはイアヌが床に脱ぎ散らしたローブを拾い、ベッドにのせた。

「当たり前じゃ。あんなよい毛皮じゃ。私みたいのがおるかも知れぬ」

「お前みたいのがいたら村は大変だろうな」

アスラは、ブルツと身震いをして水を飛ばした。

「くふ。そうかも知れぬ」

イアヌは着ていたローブ、帯、布を全てベッドの上に投げ捨て、濡れている体の毛並を調えながら、水滴を落としている。

足元は既にびしょ濡れだが、元々、窓が開いていたようで部屋中が湿っていた。

これなら、床を濡らしても文句は言われないはずだ。

「どうしたのかや？　ぬし、顔が赤いの」

「な、何を」

「くふ。冗談じゃ。ぬし、可愛いの」

アスラはそんな冗談を無表情で返した。

「毛皮は高く売れそうか？」

「私は、毛皮商ではないからの」

イアヌがローブを羽織ると、ベタベタと体に纏わり付いて気持ち悪そうだ。

「下に行くか。俺達みたいなのを見越して暖炉に火が入ってるはずだ」

「うむ」

イアヌは頷いたが、アスラをまじまじと見つめたまま動かない。しばしそのまま不意にアスラの懐に入り、鼻をヒクヒクさせた。

「な、何だ」

「ぬし、雨に濡れたのにまだ臭うの。私が言うんじゃない」

アスラは顔を赤くして、イアヌを捕まえようとしたが、体に似合わないらしくと抜け出しニヤニヤと笑った。

「雄でも毛繕いはするからの。小綺麗にせぬと雌も寄り付かぬ」

アスラは、ケラケラ笑うイアヌを無視して、扉に手を掛けた。

「行くぞ。くれぐれもボロは出すなよ」

大人気なかったがこれ以上付き合ったら何を言われるか分からない。

しかし、イアヌは美しい女の笑いで返してきた。

これに、ドキリとしたら、男として最低だ。なにせ、イアヌは雄なのだ。

そんなアスラを見て、イアヌは笑いが止まらなくなってしまったらしい。

腹を抱えて笑っている。

「ぬし、諦めて私を雌だと思って扱ってくりやれ」

イアヌはロープを翻し先に行ってしまった。

遅れたアスラは、誰が、と呟きのんびりとイアヌの後を追って、暖炉のある居間へ向かった。

？

暖炉の中で薪が盛大な火の粉をあげて崩れた。
イアヌは横でじつとアスラ達の話の話を聞いている。
勿論、女のような振舞い方で。

「ほほう。アスラさんは商人なのですか」

「ええ。この先にあるハロイズルスへ塩を売った帰りです」

アスラがニコリと商売用の笑顔を向けた。

「では、ここからハロイズルスへ戻るのは骨ではないでしょうか？」

アスラはにっこりと笑って答えた。

「いえ、ハロイズルスには戻りません」

「ほう」

目の前に座っているポケモンが目を大きくした。

アスラが声をかけたのは、暖炉の一番前に座っていた夫婦だ。

教会は寄付によって運営されているので、寄付を一番多くしている自分達が一番前に座るのは当然。といった感じだ。

だが、暖炉の前に行かなくとも十分に濡れた体を乾かしてくれるので文句を垂れる輩もいない。

「私は塩を買った際、お金は払いません。その前に、その商会の支店にほぼ同額の魚を売りました。その後は商会で如何にかして下さ

い、というわけです」

目の前のポケモンは、ふんふん、と頷いている。この手の話が好きなようだ。

アスラも、自分の話しをするのは嫌いではない。

「私はビツォと言う場所でぶどう農園を持っているのですが、そのような方法は聞いた事がありません。私達は大丈夫でしょうか？」

「この制度は、為替と言います。外国の商人たちが考え出したものです。ぶどう農園をお持ちの領主様ならよいぶどうを安く買いたたけないように注意すればよいでしょう」

「ええ。毎年その事で揉め事が起こるのです」

アスラは、ぶどう農家と商人が言い争っている風景が目に見え、ふふ、っと笑った。

ふと見ると、話をしていたポケモンの横に座っているもう一人が、こくり、こくり、と揺れている。

「失礼。まだ、アスラさんのお話を聞きたかったのですが妻が疲れている様でね」

彼は、自分の妻を揺すって起こすと、「是非、ビツォにいらした際は、当家をお訪ねください。歓迎いたします」と言っ部屋へつながる階段を上っていった。

普通、領主は自分の家名を名乗らない。言わなくては分からないと言うようであれば、それは自分も相手も誇りに傷が付くからだ。

だが、先程のは相当大きな家名だったかも知れない。恐らく、ビツォに行けばすぐに分かる名だろう。

「くふ。ぬし、楽しそうじゃったの」

「自分の話を聞きたいと言われて喜ばない奴はいないさ」

二人は椅子から立ち上がり、ゴトンと元あつた場所へ戻した。

「さて、もう少し乾いたら飯にするか」

釜戸を借りて料理も出来るぞ。と言ってやったらイア又は尻尾をぶんぶん振って喜んだ。

全く、獣っぽいところもあるものだ。

「ヘッヘッへ。旦那、なかなかやりやすねえ」

アスラは、はあ、と溜め息をついて振り返った。

「ヘッヘッへ」

声を掛けて来たのは明らかに駆け出しだと分かる商人風のマッスグマだった。

前歯が一本欠けているのはわざとだろう。

「あつしは、ゼンノと申しやしゃ。旦那、なかなかのやり手でしゃね。これから旦那みたいのを相手にしなきゃならないと思うと気が滅入りやしゃ」

ああ、とアスラは気付いた。

先程のやり取りを見ていたのだ。

「まあ、頑張ることだな。俺も駆け出しの時は商人全員が化け物に見えた」

冗談では無くて本気でそう思っていた。

そして、駆け出しの時に冷たい態度を取られた理由が分かった気がした。

これが長くやっている、既に相場情報の一つや二つを交換している。

これが駆け出しだと、情報を与えるだけでこちらの見返りが全くないのだ。

アスラは、ゼンノと名乗るマツスグマを懐かしい目で見た。

「あつしも狙ってたんですけどね、なかなか入れませんでした。それを簡単にやってのけた」

そこまで言ってゼンノはイアヌに気が付いた。

「ああ。連れのイアヌだ」

イアヌはニコリと笑いすぐに顔を伏せた。聞き耳を立てているのだろう。

「へえ。こりゃあ凄いお連れさんでしゃね」

否定はしない。ある村で神と呼ばれている龍なのだから。

「尻に敷かれなくようにするのが精一杯さ」

その言葉に、ゼノンはキョトンとした顔をした。

それを見たイアヌは下を向いたまま「くふふ」と笑っている。

「そりゃあ好都合でせ、旦那。旦那、ここだけの話、いい儲け話があるんでしゃあ。ちとあっしの話を書いて貰えませんかね」

？

アスラは人がいない事を確認した。

手に持っている獣脂の蠟燭がジジッと音を立てアスラの周りを明るく照らしている。

「俺だ、入るぞ」

ぎしぎしと音を立てながら扉を開けると、イアヌがベッドの上で寝そべっていた。

そして、尻尾を大きく揺らすと体を起こした。

「この匂い、チーズかや」

「ん？ ああ、羊の乳で作ったチーズをライ麦パンにのせて焼いたんだ。結構金が掛かっているんだから……。おい」

アスラが言い終わる前に、パン切れを二つ掴み口の中へ持っていく。

イアヌは満足げに尻尾を揺すっている。

「あんまり急ぐと喉に詰まるぞ」

そう言っ、テーブルに皿を置き、自分も向かいの椅子に座る、案の定イアヌがパンを詰まらせ苦しそうにうめいた。

「おい、大丈夫か」

近くにあった水の入っている皮袋を投げると、イアヌは飲み口を

口に当てた。

「ふう、狭い喉じゃ」

イア又は口から垂れた水を拭いそう言った。

「龍は丸呑みらしいからな」

「そりゃほれ」

イア又は自分の頬を引っ張った。

「これが無いんじゃ、悠長に噛み砕いておれぬ」

それを見たアスラは苦笑いを浮かべた。
そして、自分もパンに手を伸ばす。

「そうだ、お前あの小僧の話、どう思う」

イア又は「小僧？」と呟くと、ニヤリと笑った。

「こっちから見たらぬしもあまり変わらんかの」

「なっ！」

「大体ぬしよ。目の前におるのが誰だか分かっておるのかや？ 氷龍イア又じゃ。その眼は、数々の獲物を捉え、その耳は数々の嘘を聞き分け仲間を危機から救った、と言うのは単なる言い伝えではありんせん」

イアヌはもう一つパンに手を伸ばした。

アスラは溜め息混じりに聞いた。

イアヌの伝説を忘れていたわけではない。

商人としての記憶力は健在だが、そのほかは全くなのだ。

「で、どう思うんだ」

イアヌはニコリと笑って答えた。

「私は嘘をついていると思う」

「やっぱり」

「じゃが、百発百中ではありんせん。信じるかどうかは、ぬし次第じゃ」

「いや、俺も同じ考えだ」

だが、分からない事がある。

ゼンノ話は、今発行されているある銀貨が、銀の保有量を増やして再発行されると言うものだ。

別の貨幣を、その古い銀貨にかえ新しい物に換えてもらう。

発行主の主張する通貨価値は同じなので、銀貨は全てそのまま銀の保有量が多い物になる。

しかし、別の貨幣に両替する時はそうはいかない。銀の保有量が多い新しい銀貨の方が価値が高くなるのだ。

ゼノンはその差額から利益を生み出そうとしているのだ。

「だが、」

「嘘をつく理由が分からぬ」

アスラは、思わず顔を上げた。

イア又は相変わらず口を動かしている。

「嘘をつかれた時に考えるのは、その内容ではなくその状況じゃ。何故嘘をつくのか、流石に私でも分からないがの」

「そこまでは期待していないが、お前、俺がそれに気付くまで何年かかったと思う」

イア又は「ふふ」と笑った。

「私を誰だと思っておる。北の氷龍、イア又じゃ。ぬしの何倍も長く生きておる」

イア又はベッドに勢いよく横たわった。
埃が舞ってまるで雪の様に落ちる。

「ぬしに謝らぬといけない事があるんす」

「何だ？」

「私は嘘をつきんす」

ガバツと起き上がりイア又は顔を寄せてきた。

「ぬしには雄と言ったがの、実は私は雌じゃ」

しばしの沈黙が流れた。

ゼンノの話を聞いたときより驚いた。

「はあ？」

だから、やっと出せたこの声は素っ頓狂な声だった。

「いや、騙すつもりはなかったんじゃ。つまり……その……、何じや、自分で言いたくは無いが、狩りの神は、弱々しい雌じやと、威厳に欠けるじやろ。じゃから、村の奴らにそのような態度を取ったら、奴ら信じ込んでしまつての」

イア又はそこまで言つて、言葉を切った。顔が、晴れた日の夕焼けのようになっていた。

本当に恥ずかしかつたのだ。

だから、アスラはここぞとばかりに攻めた。

「本当に女なのか」

しかし、イア又到勝とうなど、浅はかな願いでしかない事をすぐに思い知らされた。

「触ってみるかや」

「ぐつ。今度は本当なんだろうな」

「無論じゃ」

イア又は、やっと肩の荷が降りたという顔をした。

「これで、雌の振りをする雄を演じずに済みそうじゃ」

「その振りをする雄じゃないだろうな」

「信じてくりやれ。で、どうするんじゃ」

あ、とアスラは口を開けた。

突然の告白に何の話をしていたのか忘れてしまっていた。

「とりあえず、話の真偽は置いておいて、のった振りをする」

イア又は「ほう」と頷いた。

「何故じゃ」

「話が本当なら、そのままのれば良い。嘘なら大抵、裏をつけば大きな儲け話に繋がるからな」

「ならば、私が近くで、その話は嘘じゃ、と言ったら」

「あ……」

「くふ。ぬしの答えはもう決まっておろう。どの道、のった振りをする」

そう言うつとイア又は最後のパンに手を伸ばした。

「これは、私のじゃな」

「全く、修業時代に戻ったようだよ」

アスラは大人気ないと分かっていたが、そうじゃないとやって
いられなかった。

「負け惜しみじゃな」

イアヌがそうからかって来たのが、少し嬉しい自分に、アスラは
呆れてしまった。

？

「では、ミロンで落ち着いたらヨーツの酒場へ来てくだせえ。あつしと話が付くようになってやさあ」

「分かった。ヨーツだな」

「ええ、そこで立会人の元で正式に契約を交わしやしようや」

ゼンノの伸ばした手をアスラはがっしりと掴んだ。

「では、またお会いしましょう」

ゼンノは手を振りながら、昨日の雨でぬかるんだ道を荷物を抱えて歩いていった。

「さてと」

アスラは御者台に飛び乗ると手綱を握った。

「ぬしよ」

見るとイアヌが此方を向いていた。

「一緒に行かなくてよいのかや？」

「ああ。ぬかるんだ道は荷馬車より徒歩の方が断然早いからな。わざわざ遅い方に付き合う必要も無いさ。それに」

アスラは手綱を操り、馬を動かした。
馬車の車輪がゆっくりと回りだす。

「時は金なり。だ」

イアヌは言葉の代わりに、見つめ返してきた。
その瞳は、澄んだ水の様に綺麗だ。

「くふ。ぬしらは面白い事を言うの」

アスラは水溜りを華麗に避ける愛馬に礼を言った。

「移動は短いほうが多く商売が出来るだろ」

イアヌは「ふふ」と笑った。

ヒ克蘭の村で何故狩りの神と言われていたのか、まったく分からない笑顔だ。

そこで、しまった。とアスラは直感した。

「くふ。ぬし惚れ癖でもあるのかや？」

「――！」

アスラは、顔を真っ赤にして反論したが、イアヌに上手く言い包められてしまった。

この勝負は負けだ。

ミールド川の支流の小川に架かる橋をガタガタと渡った。

イアヌは子供のように、荷台から身を乗り出して川の中の魚を覗いている。だが、賢い龍と自称しているイアヌだ。

落ちる。という心配はしていない。

が、先程から、動きづらいと言って、ロープから腰帯、増しては右腕の鱗が見えないように巻かせた布まで外して、荷台の隅に乱雑に置かれている。

確かに、この道は人通りが少ない、が、全く通らないというわけではない。

見つければ大騒ぎだ。

そうなれば、教会沙汰になってしまう。

アスラの商人生命どころか、本当の命すら失いかねない。

「おい。見られるな……」

言い終わる前に、イアヌが動いた。

バサツとロープを羽織り、腕を隠した。

アスラが何事かと前を見ると、前方から行商人らしきポケモンが歩いて来た。

そのポケモンは、特にイアヌの事を気にするわけでも無く、アスラに会釈をして通り過ぎて行った。

アスラは冷や汗を流したが、彼は振り返りもしなかった。

イアヌは、心配するな。と言いたげな顔で「たわけ」と言った。

余計な心配はいらなかったらしい。

「ぬし、あれは何じゃ？」

イアヌの指差す方を見ると、空へのびる石の壁が見えてきた。

それは目的地、ミロンの市壁だった。

ミロンは平原を緩やかに蛇行しながら流れるミールルド川の中流

に栄えた大きな街だ。

王から自治権を奪い取り、商人と貴族が牛耳る街だ。だから、関税を高く取られたが、通行証を出せとか、人相を調べられたりは無かった。

これが城下町だと、荷物より人のチェックの方が厳しくなってしまう。

おかげでイア又が見つかる可能性が減った。

「おー。ここには王でも居るのかや？」

ミロンの街に入って最初に出たのはイア又の感嘆の声だった。

「いや、ここを牛耳るのは商人と貴族だ」

イア又は「ほう」とだけ言って、行き交うポケモンや、市場に列ぶ数々の品物を眺めている。

「美味そうな果物がいっぱいあるの」

ローブの中で尻尾がばっさばっさと忙しく動いている。

「全部この辺りで採れるのかや？」

「いや、大体がもっと南で採れる物だ。船で運んでくるんだよ」

イア又は殆ど説明を聞いていなかったようで、もう一度同じ事を言っただけだった。

「甘そうじゃの」

じゅる、と涎を拭う音が聞こえてきそうだ。

「ほう。龍や狼は辛党だと思っていたんだが」

何気なくそう言つてやると、ぶんぶん振られていた尻尾が動きを止めた。

「辛いものは好かぬ。前に難破した積み荷にありついたことがあるが、その中によく熟れていそうな真つ赤で牙みたいなのがあつての。ありついてみて、みな大騒ぎじゃ。その後、川に顔を突っ込んでぬしらは恐ろしいの、と嘆いておつた」

「ハッハッハ。お前唐辛子だ。高級品だ……ぞ」

アスラの語尾が掠れたのはイアヌがすごい形相で睨んでいたからだ。

「同じ赤でもあつちの方が好きじゃ」

イアヌから解放され、指差す方を見る。そこには樽いっぱい真つ赤な林檎が積まれていた。

「林檎か、よく熟れているな」

「じゃろ」

今度ははつきりと涎を拭う音が聞こえた。

「……。そういえば、俺の知人が財産の半分を林檎にかけていたな。あのくらいの林檎なら、今頃あいつの財産は二倍だろうな。俺もや

っておけば良かった」

「？ ほう……それは、残念じゃったの……」

イアヌはチラチラと林檎の方を見ている。

他人の胸中が手に取るように分かると言っつのは、楽しいものだ。

「だが、俺なら船舶に乗るな」

「せ、船舶？」

イアヌが焦っているが、荷馬車は止まることなく、林檎を売っている目の前まで来た。

「ああ、皆で金を出し合っつてな、積める積み荷の量が決まるんだ。危険だが儲かる。聞いているのか？」

もう、首をのばして視線で林檎を追っている。

だが、アスラに気が付き振り向いた。

「それで船舶の話だが……」

「うう、林檎……」

振り向いたイアヌは半分泣き目だ。これは演技ではないだろう。

「林檎……、食べたいんじゃが……」

アスラは銀貨を渡し、笑ってイアヌの頭を撫でてやった。

シャクシャクと林檎を齧る音と、甘い果物の匂いが漂っている。
イアヌが手にしている林檎はもう五個目だ。

「はあ」

アスラが荷台を覗くと、まだ大量にある林檎が毛皮の上に無造作に置かれている。

イアヌは、遠慮の二文字を無視して、渡したリンド銀貨一枚で買えるだけの林檎を買ったのだ。

「美味そうに食うな」

「林檎は悪魔の実じゃ。甘い誘惑に満ち溢れておる」

「だったらその誘惑に打ち勝ってみたらどうだ」

ふう、と一息入れて、イアヌが満足げに此方を見た。

「貪欲は失う物が多いが、禁欲が何かを生み出すわけでもありません」

「それもそうだな」

アスラが「どれ」と荷台の林檎に手を伸ばすと、パシッとイアヌに手を弾かれた。

「私のじゃ」

「元は俺の金だろう」

そんなやり取りが暫く続いた。

「ふむ。そういえばこの毛皮、如何するんじゃ？」

イアヌが思い出したように聞いた。

「勿論、売りに行く。ラドン商会って場所だ。もっと南のほうに本店がある」

「ほう」

イアヌは興味が無さそうに呟き、「高く売れるとよいの」と言った。

こいつはこいつで、ちゃんと分かっているようだ。
だから、意地悪でこう言っちゃった。

「それはそうと、ちゃんと食いつ持は払って貰うからな」

「当たり前じゃ。私に掛ければそんなものすぐに儲けられるわ」

何処までが本気なのかよく分からない曖昧な答えが返ってきた。

？（後書き）

イアヌ「ぬしよ」

ん？

イアヌ「これでは、まるっきり同じではないか」

うつ。うゝん。大丈夫だよ（汗）だんだん変わっていくから（汗）

イアヌ「……」

？
（前書き）

新ポケモンが出てますので、ネタバレしたくない方は見ない方がいい
かもしれません（汗）

？

ラドン商会の本店は南の国にある。つまり、外国の商会だ。だが、この商会はミロンで第三の規模を誇る、大商会に発展している。

「ようこそ。ラドン商会へ」

大商会の入り口は二つある。表通りに面した徒歩での旅人用の入り口と、商会の敷地内の港に繋がっている馬車用の入り口だ。

「三年前に麦を売った者だが、今度は毛皮を売りたい」

「でしたら、入って左の男に声をお掛けください」

アスラは手で、分かった、と合図をすると馬車を進めた。

石壁のアーチ状の門をくぐり、中へ入る。

目の前に広がる景色は圧巻だ。

上流から下流から何艘もの船がやって来ては、積荷を下ろしたり載せたりしている。

それに伴う人の数は星の数ほどのようだ。

流石に、ミロン第三の大きさを持つ商会だ。

ちらりと隣を見るとイアヌが眠れないくらいに目を輝かせていた。

「旦那、何処へ行かれる」

パツと振り向くと、真っ黒に日焼けしたカイリキーが汗を拭いながらやってきた。

その筋肉は普通のものよりも二倍は固そうだ。

「イア又は横で「戦士か？」と訊いてきたぐらいだ。

「ああ、毛皮を売りに左の男に声を掛けてくれと」

そこで、アスラは気付いた。彼がその男なのだ。

「よっし。旦那の馬は預かりやす。着いてきてくれ」

カイリキーが先導して、商品や大声の雑踏の中を抜け、一つの建物に入った。

カイリキーは馬の手綱を柱に結び、馬を撫ぜながら「良い馬だな」と言った。

「ああ、文句も垂れずに働いてくれるからな」

アスラが冗談染みて答えると、

「文句を垂れる馬がいたら、見世物にしたほうが良いな」

と返ってきたので、「違うない」と二人で笑った。

カイリキーが、仕事場に帰り、また大きくなったな、と思ったと同時に奥から両手に大きな爪を持ったモグラの様なポケモン、ドリユウズが姿を現した。

「ようこそ、ラドン商会へ。店長に代わり私わたくしがお礼申し上げます。アスロ様。あ、申し訳ございません。アスラ様」

文字は同じでも発音が違う場所は多々ある。

アスラは気にしていないと言ったが、深々と頭を下げられた。

「今回は毛皮を納品くださるそうでした」

「ええ」

そう言つてアスラは荷台の中の毛皮を、一枚取つて見せた。

「途中雨にうたれたんだが、この艶を見てくれ」

「ほう。これはよい毛皮ですね。それに今年は……」

「何処も彼処も豊作で狩りをする農夫が少ない」

商売では下出にまわつた方が不利になる。

このような大商会では上に回れないが、全くの無知と思われては折角の物が安く買い叩かれてしまう。

「それでは——」

商人ドリユウズは、商品の値段を示す為の板を手に取り、チャツと動かした。

見るかぎりではなかなか良い値だが、どの通貨で計算しているか分からないため、油断ならない。

「リンド銀貨、百三十二枚でどうでしょう？」

なかなか、いい値だがここではまだ引けない。

アスラは少し考える風を装つて、顎に手を当てた。

「ここに毛皮を運んだのは、以前麦の取引をしたからなんだが。此方としてはよい関係を築きたい思っている」

「勿論で」ざいます」

「それに、行商路を開拓しようと思っ

ほう、とドリユウズは頷いて、続けた。

「では、百四十枚で如何でしょう」

アスラは心の中で、よし、と呟いた。

かなり高い値だ。

アスラは交渉の成立を意味する握手をしようとして、イアヌに引
つ張られた。

「何だ？」

顔を近づけてきたイアヌに小声で訊いた。

「どうじゃ？」

「ああ、結構の高値だった」

「そうか、ならば良かった」

するとイアヌはとんでもない行動に出た。

「ぬし様よ。暫^{しば}し待たれよ！」

突然の大声にドリユウズが、虫嫌いの女の手にとんボがとまった
かのように、ビクリと体を竦めた。

しかし、そこは商人。すぐに元の顔を取り戻した。

「何でございました？」

「うゝむ。ぬし様は気が付いておらんんだか。それとも、分かっていてそうしておるのか。そうだとしたら恐ろしいお人じゃ」

そう言い終ると、今度はアスラの方に向き直った。

「え、あ、そのどのような点で御座いましょうか。そこで改めて金額を……」

何だ、この状況は。

ドリユウズが、慌てている。

イアヌは、アスラが取れるわけが無いと思っていた、ラドン商会の上を意図も簡単にとってしまったのだ。

しかも、商売は上からの方が有利なのだ。

「主殿^{あるじ}も意地悪をするもんではありんせん」

主。その響きに少し優越感を抱いてしまった自分と、商人としての冷静に物事を見る頭が同時に働いた。

勝ったのは後者の方だ。

『そのくらい、すぐに儲けられる』

その言葉の意味がやっと分かった。

仕方ない、乗ってやろう。

「いや、そんなつもりは無かったんだが。仕方ない、お前、教えて差し上げなさい」

ゴホンろ咳払いをしようと、イアヌが自慢の牙の片方を見せるように口を歪めた。

如何やら、正解だったらしい。

イアヌはそんな事も気にせず、くるりと振り返るといかにも大人の女性と言う風な笑顔を向けていた。

？

「さて、ぬし様よ。」

「は、はい」

イアヌは、バツとアスラの手から毛皮を奪うと、ニコリとドリュウズに笑いかけた。

「これはとても良い毛皮じゃ。十年に一回、獲れるかどうかの」

「左様で御座います」

「じゃがぬし様よ。どのような生き物にも盲点はあるものじゃ」

アスラは首を傾げた。

こいつはなにを言っているんだ。大体、これ以上値を吊り上げるのは並大抵の商人では難しい。

ましてや、そんな知識、毛頭無さそうなイアヌに出来るはずがないのだ。

ドリュウズも訳が分からないと言った顔で此方を見てきて、その拍子に目があってしまった。

「ふふ。分からんかや。匂いが盲点とは、こやいかに」

イアヌは毛皮を鼻に近づけ、片目をドリュウズに向けながら匂いを嗅いでいる。

「まあ、百聞は一見にしかずじゃ」

毛皮を受け取ったドリユウズは、困った様に此方を見つめ、アスラは溜息混じりに「どうぞ」と言った。

だが、匂いを嗅いだドリユウズの顔が、見る見る驚きの表情になっていく。

「これは……、果物の匂い……、ですか？」

「そうじゃ。今年は知っておる通り豊作で、森の木の実もたわわに実っておる。それをふんだんに食ったテンの毛皮じゃ」

上は、完全にイアヌがとった。

ここから挽回できるのは、本当に金と権力が有り余っている奴らにしかできないだろう。

「ぬし様はこれらを服にするつもりじゃろう。悪き物はすぐに駄目になり、良き物は長く持つ」

「その通りでございます」

ドリユウズは負けじと、声音を商人ののそものにしたが、時は既に遅い。

この流れはイアヌのものだ。

「くふふ。この毛皮は、どちらに入ると思う？　これを剥ぐ時には大の男が二人がかりで剥いだものじゃ」

そういうと、イアヌは毛皮を力一杯引っ張るふうをした。

ドリユウズも同じような仕草をしたが、買い取ってもいない商品をそんなに強く引っ張れる筈が無い。

「それに加えてこの匂いじゃ。ぬし様よ、これが棚に並ぶのを想像してみよ。獣臭い中に、この芳香を放つ服があるのを。目が飛び出る様な高値で売れるに違いない」

初めに、イアヌの顔は大人の女性と感じたが、実際はその仮面を被った悪魔だ。

ドリュウズは、その間の手に完全に掛かってしまった。心ここに有らずという顔で、空想を膨らませている。

「さて、いかような値で買い取ってくれるのかや？」

すると、ドリュウズは板の値の表示を一度消し、改めて計算を did した。

「リンド銀貨、二百枚で如何でしょう」

アスラは顔に出さない様に心底で驚いた。しかし、イアヌは満足していない。

「うむ。毛皮一枚につき銀貨三枚でどうじゃ？ つまり……」

にこりとドリュウズを見た顔は、どんな笑顔よりもよく効きそうだ。

「銀貨二百十枚」

ドリュウズは、困惑したように、あ、とか、え、と呟いている。そこに、イアヌは追い打ちをかけた。

「主殿^{ありじ}、他に商会は」

「えっ……。分かりました、銀貨二百十枚でお願いします」

ドリュウズは握手を求め、イアヌは満面の笑みを浮かべて振り返った。

「だそうじゃ。主殿^{ありじ}」

アスラは、苦笑いを浮かべるしかなかった。

？

アスラは商談を終えた時の苦笑いを、そっくりそのままにイアヌを見た。

片手になみなみと注がれた、ぶどう酒のジョッキ、それを高々と飲み干すと、テーブルにある空のジョッキは三杯目だ。

「くうっ。やはりぶどう酒じゃな」

ゴトとジョッキがテーブルに置かれると同時にイアヌは小さなゲップをして満足げに笑った。

ゼンノは、ヨーツの酒場に行けばいつでも連絡が取れると言っていたが、その娘は「ゼンノは日が暮れてからでないと連絡できない」と言ってきた。

なるほど、酒場の娘よろしく客の足を止める方法は心得ているようだ。

現に、アスラがゼンノの名を出しても一向に連絡をとろうとしない。恐らく何時でも呼び出せるのだ。

しかし此方としても、酒場でのんびり待っている事は嫌いではない。むしろ楽しいくらいだ。

だが、今回ばかりはスッキリとした甘いぶどう酒の味も、炒った豆の香ばしい味も感じなかった。

「ん？　どうかしたかや？」

「いや、なんでもない」

その上、ここの代金はイアヌ持ちなのだ。楽しまなければ大損だ。そう思い、ぐいっとジョッキを傾けたが、やはり味気なかった。

「しかし、よい林檎じゃったの。たった半日で香りが移るくらいの林檎じゃ」

アスラは、その言葉に耳を動かした。

「今……、なんて……？」

「うむ？　ぬし、分かんかったのかや」

半日で匂いが移るくらいの……。

そこまで聞いてアスラの商人の頭脳が働かないわけが無い。これでは、まるつきり詐欺同然ではないか。

「うん。騙されたほうが悪いとは言わぬ。じゃがの、そこで怒っては半人前じゃな。こんな方法もあるのか、と感心せねば成長は望めぬの」

確かに、そうだ。
だが

「お前、村にいた時、商売をやった時期があるのか？」

そう言うってから、アスラは後悔した。

イア又はジョッキを置くと、頬杖についてそっぽを向いた。村の事は禁句なのだ。

しかしイア又は口を歪めて、アスラを見た。

「前に村に同じような方法で、麦を売ってるのを見たことがあります」

それを聞いて、アスラはほっとした。

もしも、あの僅かな間に考えついたのなら恐ろしい商人になる。

「のう。ぬしよ」

大分酔いが回っているようで、アスラに甘えるような声をだす。
ゼンノが来るまでもつだろうか。

「竜に逢ったことはあるかや？」

「いいや。そんなのが居たら、俺はここには居ないだろ」

あながち冗談ではない。

それに、一介の行商人が竜がいるような地に足を運ぶはずがない。

「ふむ。ならば狼はどうかや？」

「あるさ」

「手強いじゃろ」

アスラは、駆け出しの頃を思い出し、腹から苦いものが込み上げてきた。

「狼は陰険じゃからの。竜もそうじゃが、狼がぬしらを襲う理由を知っておるか」

アスラは、息が荒くなりそうになった。

「それはの。ぬしらを喰らってその知恵を得ようと……」

暗い森で、隊商を組んで狼に襲われたこと。
見事な動きで、獲物を逃すまい。と囲まれ、ついに、仲間の一人が……。

「もうやめてくれっ！」

ガタンと大きな音を立て、テーブルを叩いた。
イアヌの翼はビクツと動いたが、他の客は特にこちらを見ることはなかった。

「もう……その話は、よしてくれ……」

「済まぬ……。考えもせず……」

イアヌは、無言になり、目のやり場に困っている。

「まさか……、お前も人を……」

アスラは口から滑り出した言葉が、イアヌを突き放す言葉になっていた事に、後から気が付いた。

だが、イアヌは怒るような事はせずに、静かに口を開いた。

「私にも、答えられぬ事もありんす」

当たり前……か。

だが、その後のイアヌの言葉はアスラの予想していないものだった。

「私達は生きる世界が違うんじゃない」

なぐさめる言葉も、繋げる言葉も思いつかない。

その後イア又はゼンノが来るまで、口を開かなかった。

??

ゼンノとは、ヨーツの酒場で合流し、たわいのない世間話をした後、公証人の元で正式に契約を結んだ。

「これが値が上がる銀貨かや？」

イアヌは白っぽい光を放つ硬貨を、器用に鼻の上に乗せて遊んでいる。

「ああ。リンド銀貨だ。この辺りではかなり価値がある」

「ふむ。こんなちっこいのであれだけの林檎を買えるのじゃからな
じゃが、これでどうやって儲けるんじゃ？」

教会で聞いていた筈だが、理解出来ていないらしい。

「分かった。教えてやるから、金で遊ぶな。って……」

イアヌが突然立ち止まったので、振り返ると、イアヌは香ばしく
甘い匂いを放つ蜂蜜を掛けたパンを見つめていた。

「あれが欲しい」

あのパンは、たつぷりと蜂蜜が掛かっており、教会が販売を禁止
にしようかと言われる程、甘い。

一度食べた事があるが、二、三日、口が蜂蜜の味しかないよう
な気がした。

「いいが、その金を出したら、嫌な顔をされるのは間違いないな」

「何故じゃ？」

アスラは哑然としたが、すぐにイアヌにこの手の知識が無いことを思い出した。

「そんな物で払ったら釣りがどんなに嵩張ると思ってるんだ。俺が両替してやる」

そう言って、黒く錆びた銀貨二枚と、錆びた銅貨五枚を渡した。イアヌは渋々という顔で銀貨を渡したが、ふと、顔を上げた。

「ぬし、両替詐欺などしておらぬよな」

「誰が」

見ると、イアヌの姿は既に無く、パン屋の前で尻尾を振りながら、パンを買っていた。

「……お前、相変わらず美味そうに食うな」

「そうかや？」

そこまで言うと、すぐにイアヌの攻撃が始まった。顔を少し傾け、さらに恥ずかしそうな態度でこう言った。

「可愛い？」

アスラは一瞬顔を赤くして、急いで元の顔に戻した。商人なら表情は自由自在だ。

「ああ。両手と口元を蜂蜜でベタベタにしてたら子供みたいだ」

しかし、イアヌは狡猾で人の心を読む天才だった。
フワツと少女のように笑い、こつ返された。

「ふふ。嬉しい」

アスラはびくりと体を固め、そつぽを向いた。
そんなのは、反則だ。

「で、今から何処へ行くのかや？」

「銀貨の具合を確かめにいく。ラドン商会で聞き込みをやったが、
その手の情報は無かった。ああいうのは大抵一人勝ちできない限り、
恩を売った方が得なのさ」

そう、商人にとって恩ほど強い武器は少ない。

「うゝむ。これが、の」

「ああ、通貨は国の強さを示しているからな。例えば、これだ。西
の方の国が発行している、ギルドウ銀貨だ」

アスラは、財布から白く光る硬貨をだした。

「これは、銀の保有量も多く、信用度も高い。まあ、リンド銀貨の
ライバルだな」

「ほう。」

「で、だ。この金には銀が入っているが、実際の価値は同じ量の銀よりも高い。まあ、信用の塊。と言っても良いくらいだ」

アスラは、イアヌの前に躍り出ると、大きな素振りをして、説明した。

「だが偶に、銀の保有量が変われるときがある。だが、すぐに変わる事はない。ゆっくりと、少しずつ、変えていくんだ」

アスラは、「一度に理解しなくても良い」と言ったのだが、イアヌは手を顎に当て、少し頭を上げて考える素振りを見せた。

「ふむ。つまり、発行する側は、銀の含有量をちよつとずつ変え、みんなの期待をあり、丁度よい頃合を見計らって含有量を変えるわけじゃな」

アスラは、啞然とした。

こいつ、俺が十年掛けて、理解した事をあの一瞬で……。
アスラは、イアヌが商売敵で無かつた事を心底から安堵した。

「で、どうするんじゃ？」

「銀貨の様子を見に行く」

「発行所？」

イアヌの真面目な質問に、アスラは大笑いした。
それに、イアヌはムツとした顔で返す。

「一介の行商人がそんな所へ行ったら、槍で突かれるだけだ。両替商の所だ」

そう言うたアスラは、イアヌの反対側、つまり川の方を指差した。昔からの風習で、金細工師と両替商は、橋の上で商売をすると決まっている。

川は水門を閉めてしまえば氾濫する事もなく、雨が降らなければ確実に商売の出来る場所だ。

二人は、川に架かる橋職人のプライドがたつぷりと込められた、石造りの橋に足を入れた。

「ほほう。こんなに沢山の店があると、どの店に行くか迷うの」

確かに、橋の両側に所狭しと金細工職人や、両替商が店を連ねている。

さらに、その弟子達が是非とも自分の師匠の店に来てもらおうと、大声で客を呼び集めている。

ちよつとした戦場だ。

だがアスラは、その雑踏の中をすいすいとする抜けていく。

「行く先は決まっている。迷って変な奴らに捕まるなよ」

その声に気付いた、イアヌが此方を認めると、走りよってきた。暫く進み、橋の中央辺りに来たときだった。

「おお、アスラじゃねえか」

「ランズ。元気だったか」

声のかかった橋の下流側を見ると、青い体を基調とし、顔が赤い

竜。

クリムガンだ。

彼は、座っていた木箱から立ち上がり、手を振っていた。

??

「元氣だったか」

アスラは笑いながらランスの元へ歩いていった。
探す手間が省けた。

普通、行商人はどの街にも、懇意の両替商がいるものだ。
知らない奴だと両替詐欺にあうかもしれないからだ。

ランスとはお互いの師匠が顔見知りだったため、修業時代からの
仲だ。

「ああ、だが早速、師匠の口癖が移っちゃった」

ランスとアスラは顔を近づけ、笑いあった。

「尻が痛え」

両替商は立つ暇が無いので、痔になりやすい。

ランスはそれだけのやり手なのだ。

しかし、ランスはそこまで言ってから、視線が変わった。その先
にいたのは、ローブを風に靡かせ、眩しそうに川を見ているイアヌ
だ。

「お前、あんな可愛いらしい娘^こ。どこで見つけたんだ」

「見つけた。と言うか拾った。だな」

大切な事を忘れていた。ランスは無類の女好きなのだ。
そんな事を知ってか知らずか、イアヌがこちらに気付きニコリと

笑った。

すると、ランスは顔をだらし無く歪め、イアヌをずっと見ていた。対するイアヌも、好意をもたれるのはやはり嫌ではないらしく、恥ずかしそうに辺りを見回している。

「ランス。仕事はいいのか」

「うるさい。お嬢さん。お名前は何と？」

ランスはアスラの言葉を簡単に返し、声音を変え、イアヌに向き直った。

「私？ 私はイアヌじゃ」

「イアヌさん。よいお名前です」

ランスはイアヌの手を、金貨の詰まった袋を持つように、両手で包むように握った。

「ランス！ 客は俺だぞ」

いい加減、嫌気がさしたので二人の間に割って入った。

「チツ。で、何の用だ」

「最近の銀貨の様子を見たい」

言つと、そこは商人らしく「切り上げか？ 切り下げか？」と笑いながら尋ねてきた。

アスラは「さあな」と手を降ると、ランスは、木の枠に一枚ずつ

嵌められている銀貨を五枚、仕事道具の天秤の前に並べた。

「これが最近発行されたやつだ。前の教会式典の時のだな。で、半年ずつ、遡ってる。一番古いのは、三年前のだ」

アスラは、それを受け取ると、太陽に翳して見せた。
勿論、分かるはずが無い。

「そんなことで分かるようなら、俺達両替商がとくに気付いてるさ。発行所の奴らも、運ばれる銀の量も変わってない」

両替商は、毎日が金と天秤とのにらめっこだ。

だが、天秤では見分けられない僅かな差も、判断出来ると言う。本当に変わっていないのかもしれない。

「鑄潰すして調べるきは無いか？」

アスラは銀貨を天秤の近くに置いて、きいた。

「馬鹿いえ、捕まっちゃまうだろ」

アスラは苦虫を潰したようだった。

銀の含有量に変化が無い。

ゼンノの契約書通りにいくと、まずゼンノに情報料として、リン
ド銀貨十枚を払う。そして、その情報で儲けた五分を渡す。という
ものだ。

もし、そこで損をしても、情報料を返すだけで責任は負わない。
ゼンノは儲ける気が無いのだろうか。

「ぬし様。私にも見せてくりゃれ？」

そんなアスラの横から、ひょいとイアヌが顔を覗かせ、ランスに言った。

「ん？ 良いけど、分からないと思うよ」

ランスは、銀貨を手に取り、イアヌの差し出したてにそつとのせ、落ちないように、優しく握った。

「ぬし様は、悪いお人」

イアヌが照れながら言うもんだから、ランスは、呆れ返る位顔が緩ませた。

対するイアヌは、銀貨を二枚手に取ると、耳元で銀貨をカチカチと鳴らした。

「うむ」

「ハッハッハッ。イアヌちゃん。確かに音で見分けられる事は出来るが、俺の師匠の師匠も出来なかった芸当だぜ」

イアヌは何度か、銀貨を叩き、次の物を手に取る。それが終わったら次。そのまた次。と進めていく。

ついに、最後の銀貨を叩き天秤の前に置いた。

「どうだった？ イアヌちゃん」

「わかりんせん」

少し顔を傾げ、恥ずかしそうに笑った。

ランスは「そうか、そうか」とニヤニヤしながら、銀貨を片付けている。

「まあ、しょうがないよ。イアヌちゃん」

ランスは、イアヌの手を握ると、ニツコリ笑って言った。

「ランス……。仕事はいいのか……」

その言葉に、はつ。とランスは我に返り、イアヌに別れの言葉を芝居交じりに言い、橋の雑踏の中に消えていった。

「で、どうだった？」

「なにがかや？」

酒場に着くなりアスラは、イアヌにそんな一言を掛けた。

「何って、銀貨だ」

イアヌは微笑して皿に載っている炒った豆に、手を伸ばした。塩味が効いたそれは、甘いぶどう酒とは抜群に相性がいい。

「かまかけだとしたらぬしも上手くなつたの」

「お前の正体を知っているのは俺だけだからな」

「くふ。あなと侮れぬな」

イア又は、もう一度炒つた豆を手にとつた。
多少、手から零れ落ちたが気には留めていない。

「ふむ。銀貨じゃが、新しくなることに音が鈍くなつておつた」

鈍く？

銀の保有率が下がっているという事か。

「ゼンノは何故価値の下がる銀貨を集めているんだ？ 踊らされているとしても何の特にもならない筈だ」

「そんな事は、分かりんせん。寧ろぬしの方が詳しいじゃろ」

確かにそうだ。

アスラは頭を働かせた。

価値が下がる銀貨、そんな物を集めるのは自殺行為だ。

通貨価値が下がればそれだけ損をする。自らの体に毒を流し込むのと同じだ。

「ぬしよ。私等、竜は偶に地に降りんす。そうすれば見えなかった物も、見える様になる」

確かに、見方を変えれば考え方も変わる。
まさか……。

アスラの頭に、この銀貨取引の全体像が浮かび上がる。

「嘘をつくのはその内容ではなく、状況を考えるじゃなかったかや？」

その言葉にアスラは立ち上がった。

「行くぞ！ ラドン商会だ」

アスラを見るイアヌの目は、何処かしげ楽しそうだ。

嘘の裏をつけば、大きな儲け話が待っている。それに便乗すれば途方もない利益を得られるかもしれない。

アスラは、ラドン商会に走った。

??

ラドン商会に着いたアスラ達は、その面々に一から説明と、この儲け話に乗るよう説得した。

勿論、この胡散臭い話しに、面々、驚きはしたものの、それはすぐに警戒の色に変わった。

当たり前だ、ゼンノの話し自体が怪しいのに、その裏を突くだなんてとても信じられる事ではない。

更に、昨日の毛皮の件がある。

毛皮の際の担当者はイアヌを見て苦笑いだ。

だがラドン商会は一応動いてくれた。

ゼンノとの契約書を見せたことと、この取引はラドン商会の確信を得てからでいいと伝えた。

更に、ゼンノの背後関係を調べるように頼み単純な詐欺で無いことを強調したからだろう。

ここまですれば、例え詐欺だと思われても、後学のためと、首を突っ込んでくれるはずだ。

それに、上手く行けば、ラドン商会は莫大な利益を得られる。

その上、外国の商会であるラドン商会は、他の商会を出し抜く期を虎視眈々と狙っている。そんな彼らが見逃すはずがない。

そんな胡散臭い話でも可能性は見逃さないだろうという予想は見事に当たったのだった。

「のう。ぬしよ。何故ラドン商会なんじゃないか？ 他にも大きな商会があるじやろうに」

ラドン商会から、宿に戻す途中、川に降りる階段でイアヌが不思議そうに尋ねた。

「ああ、肝心のお前には教えていなかったな。理由は二つだ。一つは、ラドン商会で聞き込みをやっただろ。そこから考えて、ラドン商会は白だ」

イアヌは、分かっているのか分からないが、続きを促した。

「もう一つは、ラドン商会は、この街で一番良い耳を持っているからだ」

「耳？」

「そうだ、ラドン商会は外国に本店を置く商会だ。いわばここは、何も分らない新天地。そこであれだけの規模に商会を大きくするには、耳をよくするしかない」

「ふむ。私程ではないが、よい耳じゃな」

イアヌがフツツと面白そうに笑った。

「そうだろ。今回の件では、最高のパートナーだ」

パートナーか……。

アスラはチラリとイアヌを見た。

着ているのは、男が着る飾り気の無く、茶色いローブだ。

この件が終わったら、何か服を買ってやるか。

思ったところで、イアヌに引つ張られた。

その目は物をねだる子供の様な目だ。

結局、アスラは今朝買ったのと同じ、蜂蜜をたつぷりと掛けたパンを買わされたのだった。

翌日、ヨーツの酒場では、ゼンノとたわいもない話をした。勿論、ただのお喋りではない。

何処かにラドン商会の者が、その様子を監視している筈だ。しかし、ゼンノの話はどこか懐かしく話は弾んだ。

「あつしは、干し肉で商売してたんですがね、大分金が貯まったんで、もうすぐ馬車を手にできそうなんでしゃあ」

「干し肉なら、俺もやっていた。だが、馬屋が、牝馬を薦めても、雄を選ぶんだぞ」

「馬が、喋るって話でしゃね。あつしは代金を取られる気がしやす」
ここから数日間、ラドン商会はゼンノの身边は洗いざらい調べるはずだ。

「間に合うのかや？」

宿に戻るやいなや、イアヌはぶどう酒片手に、ベッドの上に陣取った。

「こうしている間にも、敵に銀貨が集まっておるんじゃないかや？」

アスラも、ぶどう酒を注ぐと、ぶどう酒に映る自分の顔を見た。ぶどう酒は透き通り、ギョッキの底が見える。

「大丈夫だろう。だからこそラドン商会を選んだんだからな」

イアヌは、「ふむ」と言って、ぶどう酒を一口。

「しかし、よく飲むな」

イアヌはぶどう酒を零さないように、ベッドに横たわった。

「酒の魅力は大きいからの」

確かに、分かる気がする。

「まあ、かなり良い酒だからな。普段はぶどうの搾りカスでギトギトの物や、砂糖やシヨウガを入れないと苦くて飲めない物を飲む」

「ふむ……。そうなのかや。このくらいが普通じゃと思つとった」

アスラはぶどう酒の入ったギョッキを置いた。

「はは、そりゃあ良いご身分だ」

アスラは自分を罵った。

イアヌが、壁側を向くように寝転ぶと、体を丸めてしまった。

イアヌは自分を特別な存在に仕立て上げる言葉を嫌う。神が年に一度、祭を要求するのはあまりに寂しすぎるからなのだ。

「あ、いや、お前は、なんだ……。平民？ いや、平凡というか…

…」

アスラの貧弱な語彙にイアヌは小さく笑い、ベッドを転がりアスラの前に来た。

「くふ。貧弱な語彙じゃ。それでは雌も飽きれるじゃろっの」

イアヌの言葉にぐうの音も出なかった。そこをイアヌに「身に覚えがあるのじゃな」と笑われた。

「まあ、私も大人気なかった。じゃが、本当にもう嫌なのじゃ」

イアヌは同じベッドに座ったアスラに寄りかかった。

フライゴン特融の角は、アスラの頭上にある。

そして、物欲しげにアスラを見た。

以前は林檎をねだっていたが、今は何が欲しいのだろう。

「一人は、怖い」

イアヌは、アスラの腕を縋るように掴んだ。

「目を覚ますと、誰もおらぬ。友人も、仲間も、シラギア様も」

アスラは、何も言わずに聞いてた。

ここで何か言ったら、イアヌが崩れてしまいそうな気がした。

「一人は嫌じゃ。一人は寒い。一人は怖い。一人は……」

アスラはそつとイアヌの頭を撫ぜた。

「俺たちも、同じ夢にとらわれる事がある」

戦火、疫病、飢饉などで、村一つが無くなるなんて、珍しい話ではないのだ。

だから、行商人は居場所を求める。

「世は変わる。私の考えは古すぎるのかもやしれぬ。それに、シラギア様も……」

「お前は、何か変わったのか？」

イア又は、ゆっくりと顔を擡げた。

「お前が変わっていないのなら、変わっていないさ」

イア又は、涙を溜めた目を向け、満面の笑みを浮かべた。

「ぬしに励まされるようでは、私の名折れじゃ」

暫くして、小さな寝息が聞こえてきた。

アスラは起こさない様、イア又を横にさせると毛布をかけてやった。

翌日、ラドン商会に呼び出された二人は、商会の奥に通された。

両開きの扉をくぐると、暖炉のある大きな部屋だ。

壁は綺麗な木目が浮き出た板が使われていて、目の前には二人分

の椅子と大きな机。その上には沢山の書物が積んである。

「アスラ・アビロート様、イアヌ様。どうぞお座り下さい」

凜と通る少し低い声。

「私^{わたくし}、当ラドン商会ミロン支店を統括させて頂いております。ウォルゾフ・ハントと申します」

スラリとした長い体は、上が若草を思わせる緑色、尻尾は蔦植物の葉のような物が付いている。

凜とした顔立ちで見つめてくる赤い目は、睨まれたら動けそうも無い。

「この取引お受けいたします」

ジャローダー——ハントは外国製の丸眼鏡を少し上げながら、厳かに言った。

そこから分かる、この威厳。成る程、本店の面々が彼を支店長にしたいわけが分かる。

「我々が調べた結果、後ろにはドイツ商会が控えていました」

「ドイツ商会？」

「ええ、あの言わずと知れたこの街で第二の規模を誇る、穀物を中心とした商会です」

確かに、ドイツ商会が行っているのは確実だろう。だが、これはもっと大きな力が無くては成立しない。

例えば、貴族のような。

「我々も、その裏に貴族が居るのと考えております。ですが、アスラさんの言うとおり、先手を打てば何とでもなりそうです」

支店長、ウォルゾフは不敵に笑った。

彼らの本店は、王侯補の有名貴族がやって来るような場所だ。余ほど、自信があるのだろう。

だが、誰が相手でも、商人は弱腰な態度を取れば負けだ。

「それ素晴らしい」

アスラは、大げさな態度をとり、続けた。

「では。分け前の話に参りましょう」

??
(前書き)

今回、張り切っちゃったらこんなに長くなってしまいました
多分、今までで最長です(汗)

??

真昼間から、やっている飲み屋は少ない。

ここは、そんな飲み屋事情を逆手に取り、真昼間から開いている数少ない酒場だ。

「何でも良い。薄めた果汁と、パン二人分を頼む」

アスラは顔色が悪いイアヌを引っぱり、何とか椅子に座らせた。

イアヌは座った瞬間、ばたりとテーブルに顔を付けた。ようするに二日酔いだ。

「誇り高き竜も、酒に酔ったら形無しだな」

イアヌはピクリと睨み返してきたが、すぐに唸って、ぐったりと目を伏せた。

反論できる状態ではないらしい。

「弱いわけでは無いだろうが、昨日はあれだけ飲んだんだからな」

「うゝ。二日酔いなんて何百年ぶりかやゝ」

イアヌはぶつぶつと文句を言っているが、後の祭りだ。

余計、頭が痛くなってしまったようだ。

「しかし、酔っ払った竜なんて、何だか格好悪いな。酔った熊ならたまにいるが」

ぶどう酒を作る時、発酵させるために、麻袋に入れたぶどうを吊

しておくのだ。

それが、なんとも良い匂いを放つので、熊が持つて行くことがある。

その熊を追っていくと、発酵したぶどうで酔って、簡単に捕まえられたそうだ。

「うむ……。そのような熊と飲んだ事が一番多かったの、ぬしらの貢ぎ物もあったが……」

アスラは「まるでお伽話だな」と笑った。

「教会が聞いたら、目を丸くするな」

「酒の魅力には勝てぬ。何遍、二日酔いになっても飲んでしまいます」

アスラが「俺達と同じだな」と笑うと、イア又は頭に手を載せ、恥ずかしそうに笑った。

「はいよ。パンと林檎の果汁だ」

そんなやり取りの間に、注文した物が運ばれた。

店主はイア又を見るや、「二日酔いかい？」と笑った。

アスラが適当に返し、店主がカウンターへ戻ると、イア又が林檎の果汁に手を伸ばすのがほぼ同時だった。ピチャリと、舌で舐め、獣が飲むように、ピチャピチャと器用に口へ運んだ。

「う……む……」

少し顔の赤みが引いたところで、イア又は林檎の果汁から手を引

いた。

「だいぶ良くなったじゃないか」

「うむ……。じゃが……。今日はもう無理じゃな」

イアヌは背凭れに寄りかかると、ずるずると滑り落ちていく。

「その様子だと、動けそうにないな」

「じゃから、今日は無理だと言っておる。それとも、私について来て欲しい何か用でもあるのかや？」

イアヌは何時ものからかうような眼でアスラを見た。

アスラは小さく顔を横に振ると、イアヌは悔しそうな顔で返した。

「商館に顔を出しがてら、買い物でもどうかなってな」

「う。ぬし一人で行ってくれ。私はここで少し休んでから、宿に戻っておる」

「そうか」

アスラは手にしたパンをかぶりついた。

ほろ苦い、ライ麦パンだ。

「そうじゃ。ぬしに何か、言わなくてはならぬ事があったような……」

……

イアヌは腹が減っているのか、パンを一口でほおりこんだ。

「うゝ。思い出せぬ……」

「大切な事なら、そのうち思い出すだろ」

アスラは、笑って答えたが、イアヌは返事をしない。
パンを片手にイアヌを見た。
微かに震えている。

「いかん……。吐く……」

「なっ！ 店主！ 桶だ！ 桶！」

アスラは飛びのき、店主を呼んだ。
そのあとの事は思い出したくも無い。

獣脂の蠟燭がジュウツと音を立てた時、アスラはペンを置き固ま
った体を動かした。
机の上には、ペンとそのインク、そして、店の絵が描かれた紙が
あった。

「ん……。何の音じゃ？」

アスラがパンを口にした時、さっきまで二日酔いで大変な事にな

っていたイアヌが起き上がっていた。

「もう大丈夫なのか」

「うむ。大分の。しかし」

イアヌは、腹を押さえて言った。

「腹が減った」

アスラは苦笑いして、手近にあったパンを投げた。
イアヌはそれを受け取ると、すぐに口に入れたが、「ん？」と不思議そうな顔をした。

「苦い」

「ああ、焦げた物を貰ってきたんだ。水差しは……」

アスラが水差しの場所を教える前に、イアヌはそれを手にしていた。

アスラの持ってきたパンは、焦げたり欠けたりして売り物にならなくなった物だ。

何より、安く仕入れられるし、アスラはこの苦さが好きだった。

「何をしておるんじゃ？」

そんな事を考えていたらイアヌが、ひょいと肩から顔を覗かせた。

「ほほう。なかなか上手いの」

イア又は、店の絵を見るやそう言ってくれた。
お世辞でも、嬉しいものは嬉しい。

「外国の商人を相手にする時は、絵で商談を進める事があるからな。
普通の商人なら扱った事のある物の絵はそらで描ける」

「ほう。店でも持つのかや」

「ああ。この取引が上手くいったらな」

現在のラドン商会で得られる儲けは、ラドン商会の儲けの五分。
だが、これは、リンド銀貨、数万枚から数十万枚の金の動きがある。
それによって得られる利益は途方も無い額になるだろう。必ず、
アスラが一生働いても手に出来ない位の金がラドン商会に入る。
たとえ五分でも、リンド銀貨1千から二千枚はある筈だ。

「銀貨千枚があつたら店を持てる。全ての行商人の夢だ」

アスラはその夢が、今自分の手の届きそうな場所まで降りて来て
いる事に、胸を躍らせた。

「ラドン商会の奴らの尻を叩いて回りたいくらいさ」

イア又は、「ほう」と言うと、ベッドに腰を下ろした。

「前に、『この世のの全てを絵に記して残したい』と言っていた絵
描きがおつたが、その夢は叶わず仕舞いじゃろうな。それに比べて、
ぬしの夢はもうすぐと言うわけか」

アスラは、笑いながら答えたが、イア又は首をかしげた。

「じゃが、今でもなかなか儲けておろう」

「儲けるだけならな」

「他に何かあるのかや？」

「行商人は同じ商路を何度も回り続けるんだ。街に居ても行商人は儲けられないからな。だからろくに友人なんて出来やしない」

アスラは、イアヌの横に座った。

「だが、店を持てば違う。街の仲間や友人が助けてくれるし、嫁探しが今よりずっと楽になる。それに、入る墓が決まっているのは安心するだろ」

アスラは「一緒に入ってくれる人が見つかるかは運次第だがな」と付け加えて笑った。

「じゃが、ぬしが店を持ったら私は困りんす」

イアヌが、ぱたりと寄り掛かってきた。

「お前の目的は、昨日言ってた仲間や『シラギア様』を探すのか」

イアヌは小さく頷いて寂しそうに言った。

「ぬし毛はは、シラギア様にそっくりじゃ」

イアヌは、ぐずつ、と鼻を吸ると目に涙を溜めた。

そして、アスラに縋ると、大粒の涙を流し始めた。

「私とシラギア様はの……。常に精神で繋がってあった……。じゃが……。それが突然消えたのじゃ……。呼び掛けても返事はこなんだ。もしかしたら……」

アスラは、そつと頭を撫でてやった。

「まだ、死んだと決まったわけじゃないだろ。例え死んでいたとしても、それを探さないのは無礼だ」

イア又はそつと涙でぐちゃぐちゃになった顔を上げた。

「ぬし……」

「それに俺も商路を拡大しようかと思つてたころだしな。それにお前一人ぐらい居たつて問題はない」

アスラは机の上に置いてあつた紙に手を伸ばした。

「ほら、これで顔を拭け。折角の顔が台無しだぞ」

「じゃが……」

「何度も描いては消してるんだ。それに取引はまだ上手くいったいないんだ。皮算用にも程がある」

イア又は小さく礼を言つて、顔を拭き鼻を吸つたりした。

「さて、何時までも起きてたら蝋燭代の無駄だ」

「くふ。商人らしいの」

アスラは蠟燭を吹き消すと、辺り闇に包まれた。

アスラは自分のベッドに体を潜らせると、何か違和感を感じた。掛かっている毛布が、膨らみ、此方へやってくる。

ぷはつと顔をだしたのは、イアヌだった。

「な、にを……」

「ふふ。野暮な事を言うもんじゃありません」

ふと見ると、イアヌはローブを羽織り、アスラの荷物を手にしていた。

「しっ」

アスラが事情を訊こうとするのを制すると、イアヌはアスラの口に指を立てた。

「ぬしに言おうと思っていた事を思い出したんじゃが、少し遅かった」

アスラの脳裏に可能性が生まれる。

「扉の向こう、三人じゃ。恐らくまともな客ではないの。さいわい、ここは二階じゃ」

ここまで言われたら、イアヌの考えは簡単に予想がつく。

「ぬしよ。覚悟はよいかや？」

アスラは、イアヌから短剣を受け取り、何時もの定位置に着けた。

「勿論だ」

??

明りを灯す時間は無い。

アスラは手近な荷をひつたみると、イアヌに目で合図をした。

イアヌの目は暗闇で薄い青に光り、分かり易い。

イアヌは、窓を開け放つと言った。

「私のこの身体、月明かりの元でとくと見やんせ」

語尾が少し上がっていたので楽しいのだろ。

イアヌは何の躊躇もなく、二階から飛び降り地面に着地した。

異変に気付いた外の三人は、鍵を壊し部屋の中へ入ってきた。それと同時にアスラも意を決し、先に降りた仲間と同じように飛び降りた。

しかし、そう上手くはいかず、足を滑らせ顔を地面にぶつけた。

顔を上げると、イアヌが笑いながら手を差し伸べ、アスラの手を掴んだ。

上からは「下だ!」と怒号が聞こえ追っ手の存在を知らしめる。

「ぬし、行くぞ」

バツとロープを翻し走り出したイアヌをアスラは重い足取りで追った。

異変に気付いたイアヌが振り返る。

「馬を殺しても奴等には何の特にもならん筈じゃ。ほとぼりが冷めてから取り返せばよからう」

その通りだ。だが……。

「今は、逃げるのが優先じゃ」

アスラが反論する前にイア又はアスラの手を掴み、走り出した。

二人は暗い路地裏を走り抜けて行った。
風が耳元でビュウビュウ鳴っている。

何も見えない。イア又はどうやって走っているのだろうか。

「えっ……」

そう思ったときには、既にアスラは階段の下で、地面に顔をぶつけた。

「うむ……。包囲は抜けたようじゃ」

イア又は耳元に立てていた手を下ろした。

「どっちに行けばよいのじゃ……」

道は二股に分かれ、どちらも月明かりの届かない漆黒の闇に包まれている。

アスラは、空を見上げた。イアヌの言う行き先はあそこしかない。北極星はあそこか……。

「こつちだ」

アスラはイアヌを追い抜き再び走り出した。

「それにしても、お前は、何を、言いたかったんだ……？」

体力には自信のある行商人でも流石に走り続け一度も休んでない。出てきた声は掠れて、自分でも聞き取りにくかった。

「うむ。ぬしがゼンノの裏を探れるのならば、奴らもその逆が出来るのではないのか。との。まあ、こうなってしまうえば意味は無いが」

奴らと言つのは恐らくドイツ商会だろう。イアヌの行き先もやはり同じだった。

ラドン商会。

現在、この街で最も安全な場所はそこしかない。

「西の大通りだ。ここを抜ければラドン商会だ」

アスラは路地裏から誰もいない事を確認し、飛び出そうとした。

「待ちんす」

が、突然イアヌに壁に押し付けられ、口を押さえられた。

すると、何人もの足音が耳に入った。

そつと覗くと、ドイツ商會が雇ったのだらう。ロープで身を完全に隠したポケモン達が長い棒を手に集まってきていた。

聞くと、囁き声の中に『ラドン商會』という単語が聞こえた。

「くそつ。この通りを抜ければラドン商會はすぐなのに」

「ぬしよ」

その声に振り向いたアスラは危うく声を上げそうになった。

イアヌが腰に掛けていた剣をアスラに手渡したのだ。見た目ほどに重くないが、気を抜いたらバランスを崩しそうだ。

「私が囹になる。その隙にぬしはあのの商會へ……」

「何を言っているんだ！」

確かに街での『技』の使用は原則禁止だ。見つければ裁きを受ける事になる。それに技を使えば目立ちすぎる。ドイツ商會がそんな危険を侵すとも思えない。

だが、そんなこと出来るわけが無い。

命に釣り合う取引など、この世には存在しない。

「孤独は死に至る病じゃ」

イアヌは、そう言つと、まだ決心がつかないアスラを睨んだ。

「ぬしが囹になって私があこの商會に、助けてくりやれ。と頼むのかや？ この右腕の鱗を晒して。無理じゃろ」

イアヌの言う通りだ。

ラドン商会在教会に訴えれば、それこそ一貫の終わりだ。

「それに捕まったとしても、一日二日は、鱗も見つからぬ。見つかったとしても、ぬしの様に疑って掛かるのが定席じゃ。」

アスラは不思議と苦笑いが浮かんだ。

初めて会った時、自分自身がそうだったからだ。

「それに、ぬしが助けに来てくりやる筈じゃ」

イアヌはそつと反対側の通りを覗いた。

「くふ。狩られる側に立つのもなかなか面白そうじゃ。二度と立つのは御免じゃがの」

ニヤリと笑い、あつ、というまにイアヌは西の大通りとは反対側の通りへ飛び出した。

すぐに、「いたぞ！」とか「イノエ通りだ！」とかの大声が街に響き、西の大通りから、松明の明かりが動いた。

アスラはラドン商会への道を確かめると、一直線に走り抜けた。

しかし、途中、ラドン商会の前を張っていたドイツ商会が雇った血の気の多そうな面々に見つかった。

「待て！」と声が聞こえた。予想以上に距離は近い。追いつかれる。

しかし、天はアスラを助けた。

ラドン商会に近付いて行くと、荷番がまだ、仕事をしていた。

「昼間来たアスラだ！ 助けてくれ！ 追われている！」

無我夢中で叫んだアスラの声に気がついた荷番は「走れ」と言
て、問を狭めた。

アスラが飛び込むと同時に鉄冊のは固く閉じられた。

「そいつをこっちに渡せ！」

追ってきたドイツ商会の面々は、冊を叩きアスラの身柄を求めた
が、ラドン商会がそんなこと許す筈が無い。

「控える！ ここを何処だと心得る！ リヒティーズ公国公認の、
大ラディオーネ公爵様経営のラドン商会である！ その鉄柵は公爵
様の持ち物であり、そこに来られた者は公爵様の客人！ その棒で
この方を叩くのであれば、公爵様の足を叩くのと同等に思え！」

荷番の一喝で不利だと判断したポケモン達は、笛を吹き鳴らすと
足早に夜闇に消えていった。

「ありがとう。助かった。アスラ・アビロートだ。ヴォルゾフ支店
長を呼んで欲しい」

「礼なら、遠くのラディオーネ公爵に言ってくれ」

そう言つと荷番はぶどう酒の入った皮袋を手渡してくれた。

「ここはラドン商会。焼き入り、討ち入りは日常茶飯事だ。支店長
にも、もう連絡は行っているだろうよ」

流石だ。ここをパートナーに選んで本当に良かった。

「アンタも随分と綱渡りな商人なんだな」

荷番は、ゲラゲラと笑った。

「連れが囷になってくれてね。此処へ来る筈だから暫く待っていたんだが」

「まあ、落ち着け。焦っても良いぶどう酒は出来ねえ。容姿さえ言ってくりゃ、俺が教えてやるよ」

アスラは頷いて、取り合えずぶどう酒を一口飲んだ。
甘いぶどう酒が疲れきった頭を働かせる。

「ああ、フライゴンの娘だ」

荷番は「ほお」と相槌を打った。

「そいつは別嬪か」

アスラは思った。

例え騎士の大群が、この街に攻めて来てもこの商会だけは生き延びるだろうな。と

だから、安心してこう言った。

「ああ。十人が十人振り返る」

??

「十中八九、ドイツ商会の仕業でしょう。我々の手の者が尾行をし、無理矢理といった形で連れていかれた竜を見た」と

ヴォルゾフはアスラを見ていった。

寝ていた所を起こされやって来たようだが、そんな素振りは一切見せない。

それに、その竜はイアヌの事だ。

「私も……。同じ考えです」

アスラは俯いて言った。

「恐らく、銀貨のからくり気付いた私が、この商会に話を持ち込んだのがばれたのでしょう。そこでそれを阻止されないために、連れをさらったのでしょう」

「それは変ですね」

ヴォルゾフが顔を動かすと、かけている眼鏡に光が入り、ヴォルゾフの目がアスラから見えなくなった。

「何が変なんですか！ 奴らは、私の連れを人質にして、銀貨取引から手を引かせようとして……」

そこでヴォルゾフの目が見えた。

アスラは冷や汗が噴き出るのに気付いた。

「まさか……」

「ええ。我々は貴方から既に利益を得るためのからくりを聞き出し、さらに莫大な金額を費やしました。

ここで手を引けば、多大な損失が我々の商会に発生します」

アスラはその言葉が自らの死刑宣告を聞いている気分だった。

「そこから、得られる金額は途方もありません。私は、商会の利益と、アスラさんとの関係を天秤にかけるのなら――」

アスラは無意識に椅子の背もたれにすがった。

恐ろしい現実が目にあらわになっていく。

「申し訳ありませんが、私は商会の利益を取ります」

アスラは崖から突き落とされるような感覚を得た。

呆然とヴォルゾフを見つめ、視界が暗くなってきた。

使えなくなった人質がどうなるかは火を見るより明らかだ。男なら奴隷商に売られ、女なら娼館行きだ。

そうなれば、二度と再会は有り得ない。

何処に抜け道があるはずだ。

誰も傷つかず。更に利益を得る方法が。

ふと、アスラは顔を上げた。

「ドイツ商会も同じ事を考えている可能性は高いですよね？」

「ええ、ですから変だと」

ヴォルゾフはふうと溜息をついた。

「ですから、それを逆手にとります。まあ、私も妻が同じ状況に置

かれたら同じ事をするでしょうしね」

アスラは顔を赤めた。

種族は違うが、そんな風に見られていたと思うと、やはり恥ずかしい。

それに気付いた様子でヴォルゾフが笑った。

「ですから、我々は少しでも情報を集めたいと思っています」

しかし、ヴォルゾフはすぐに表情を硬くした。

「何か、心当たりはございませんか？　どんな些細な事でも」

アスラは唸った。

考えられる可能性は無い。ただ一つを除いて。しかし、それに気付くはずが無い。道中も街でも細心の注意を払っていた。

「何か、お有りなのですね」

ヴォルゾフはアスラの僅かな表情の変化に詰め寄った。その時。

「失礼いたします」

扉がノックされ、商会のポケモンが入ってきた。

「如何した」

ヴォルゾフがその場を離れ、アスラは、ほう、と気を休めた。

「先程、文が投げ込まれました。おそらく、ドイツ商会の物かと」

「竜とその牙を持つ者へ？」

ヴォルゾフが読み上げた宛先に、アスラが立ち上がった。

「済みませんが、先に読ませて頂けませんか」

ヴォルゾフから受け取った手紙の封を破り、ひっくり返した。

手紙と一緒に、群青の六角形の細長い鱗が数枚、落ちた。

アスラは手紙を開くと、一息で読み終えた。

目眩がしそうだ。

ヴォルゾフに手紙を返すと、彼は一目見た瞬間、驚きの表情になった。

「こ、これは……」

手紙の内容はこうだ。

『竜は預かった。教会の扉が閉じる事はない。竜が入らない様に出入り口をしっかりと閉じておけ』

これは脅迫状だ。イアヌを教会に突き出されなくては、手を出すな。そういう意味だ。

「この鱗は、どの種族も持つてはいない。アスラさん、分かりますか」

アスラは決めた。

言わなければ、この商会ごと火にくべられるのだ。

それならこの秘密は強力な力を持つ筈だ。

「……。私の連れ。イアヌは……。狩りの神と呼ばれている竜の化身なのです」

その時の、ヴォルゾフの顔は何にも例えられないだろう。
アスラは、全て話した。後は商会の力と運に頼るしかない。
眠れない夜が長くなりそうだった。

?? (前書き)

私は何故、御三家を敵に回したがるんだろう…… (汗)

バクフーンファンの方、済みません (謝)

??

ウォルゾフは、鱗をしげしげと眺めた。

こんな物、偽装すればいくつでも作れるが、そんなことをする必要は無い。

いや、商人である以上、そんなことは関係ない。

「成る程。アスラさんのお連れの方を教会に連れていかれたくなければ、邪魔をするな。」と

「ですが、銀貨取引が終わった後に、教会に行くとも考えられます」

ウォルゾフは溜め息をついた。

余程、状況は複雑なのだ。

「何か、良い案は無いものですかね」「こちらから打って出るしかないと思います」

アスラは言った。

現にそれしか思いつかない上、それが最善だと思う。

「ちょっと待って下さい。事態を整理しましょう」

ウォルゾフは、黒と白のチェック模様の盤と、それに使う駒を数個取り、置いた。

「王は随分と大胆な切り下げを行うようです。さらに、我々の調べで財政が悪化していることも突き止めています」

ウォルゾフは、王を指す駒と適当な駒を盤に置いた。
この駒はドイツ商会だ。

「そして、ドイツ商会は銀貨を集め、王が管理する特権を引き出すとして、
うとしている」

王が持つ特権は、造幣権、鉱山の採掘権、関税設定権、国立都市の市長決定権だ。

「そうです。全て金の成る木です」

そして、その横にもう一つ、駒を置いた。ラドン商会だ。

「それを我々を横取りしようとしている」

ドイツ商会の横に、聖導師の駒を置き、アスラを見た。

「ですが、ドイツ商会は教会を味方につけました」

これでは身動きが取れない。ドイツ商会は何時でも、ラドン商会を悪魔憑きと契約した店だと告発できるからだ。

手があるとしたら、今、ドイツ商会を告訴することだが、それはイアヌは助からない。

アスラはふと、大切な登場人物がいることに気が付いた。

「我々が先に王との交渉を済ませ、その特権を餌に釣るのはどうでしょう？」

「何故です」

「王との取引を済ませてしまえば、ドイツ商会は告発できません。教会に睨まれたらたとえ王としても身動きが取れなくなります。そうなれば、ドイツ商会はどれ程の恨みを買つか」

「確かに。ですが、特権での商売は商人共通の夢です。それを放棄するのは……」

「でしたら此方からドイツ商会を告発しますか？ 私はラドン商会に不利な証言をしますよ」

アスラは机の上に飛び乗るとヴォルゾフにそう詰め寄った。
アスラ達とラドン商会が取引をしたのは事実で、そこから無実へ持つて行くのは難しい。

「それに、私の勘ではまだドイツ商会に銀貨は集まってきたいない筈です」

アスラは机から飛び降り、ヴォルゾフを見た。

「まず、イアヌを捕らえてから、すぐに告発しなかった事です。手元に十分の金があるのなら敵はさっさと潰したほうがいい」

ヴォルゾフは頷いた。

「そして、ゼンノの様な者を使っている事です。恐らく、後ろに控えている貴族はたまたま手元に銀貨があつたので売りに来たという状況を作りたいでしょう」

そうすれば、今後の関係は更によくなる。

「……。仮に、ドイツ商会に銀貨が集まっていないうとしましょう。貴方は如何するのです」

「イアヌを連れ戻し、交渉が終るまで逃げ続けます」

「そんな無茶な」

ヴォルゾフは声を荒げた。

確かに、普通なら不可能に近い。だが、一緒に連れて逃げるのは狩りの神と呼ばれた竜の化身なのだ。

「彼女は私をここへ送り届けるためにわざと罠になりました。ただ漠然と逃げるだけなら捕まる事は有り得ません」

アスラは言いながら手を固く握った。
自分をもっとしっかりしていれば……。

「それで、交渉が終わるまで、どのくらいかかるでしょうか」

ヴォルゾフは、目を少し落し、考えるそぶりをした。

「今から、速馬を出して、城に着くのに半日、交渉を即決で済ませば一日ほどで、交渉が長引けばそれだけ遅く」

アスラは驚いた。商人は表情を自在に操れるが、これは素直な感想だ。

「今すぐなんて、可能なんですか」

「銀貨の集まる場所は限られます。我々には大よその見当はつきま

す。実際の取引の当日までに手元になれば問題ありません」

ウォルゾフは、ふうと息をついた。

「本当は後ろにいる貴族を確認した上で交渉に望みたかったのですが……。そうすれば、相手の銀貨を横取りできたかも知れない」

「しかし、王を相手に即決など……」

アスラの言葉にウォルゾフは掛けている眼鏡を整えた。

「ラドン商会がその気になれば、どんな商談も即決以外有り得ません」

日は昇り始め、窓から光が差し込んできた。

結局、二人は一睡もしていない。が、策は整った。後は実行するだけだ。

アスラとウォルゾフは契約の証、握手を交わし、面々の準備を急いだ。

「アスラさんには、地下で合流して頂きたい。合言葉はリョーゾとミニン」

「二大金貨ですか」

ウォルゾフはニコリと笑った。

「縁起が良いでしょう」

アスラは用意された幌付きの馬車に飛び乗った。

馬車はゆっくりとミロンの街へ走り出した。

馬車は角を何度も曲がり、ミロンの街を進んでいく。

アスラは目の前のポケモンに目を向けた。毛皮の際、担当したあのドリュウズだ。

「まさか、地下にそれ程の通路があるとは思いませんでした」

アスラの素直な感想にドリュウズは笑って答えた。

「万が一の備えですよ。例えば騎士の大群がこの街を囲んでも、我々だけは生き残ってみせますよ」

ドリュウズは、「私もこっちが専門です」と笑った。

確かに明るい場所で商売に従事するよりよっぽど似合っている。

「ですが、我々にもライバルはいます」

「教会ですね」

国に捕らわれない教会は独自の戦力を保有し、異教徒の討伐の名の下、戦争を起こしたりする。

西の大遠征がいい例だ。

そんな事を考えていると、馬車が急停止した。

御者が、酔っ払いに何かを叫んでいる。

こんな事まで準備をしていたのかと思うと、少し笑みがこぼれた。

「市場開放の鐘と同時に我々は事を起こします。アスラさんは、地下へ降りたら右手伝いに突き当りまで行って下さい。私がラッゼと言ったら、カムイと返して下さい」

そう言いながら、ドリユウズは床を外し、地下通路に通じる蓋を開いた。

「好景気に不景気ですか」

全く、ラドン商会はこの手の言葉遊びが大好きなのだ。

「ええ、わかり易いでしょう。さ、アスラさん、お早く」

アスラは、暗く穴を開けている通路に飛び降りた。

水が足首の辺りまである。

ギィっという音と共に蓋は閉じられ、馬車の遠ざかる音がした。

「右手伝い、だったな」

アスラはそつと暗い地下を進み始めた。

イアヌは鎖を引っ張ってみた。

勿論、解くつもり等無く、ただ弄んでいるだけだ。腕を縛られた

状態では、解きたくても解く事は出来ない。

すると、目の前の扉が開き、一筋の光が彼女を照らした。

「だいぶ大人しくなっただようだな」

そう言いながら、ポケモン——バクフーンはイアヌの顎を撫でた。

「狩りの神と言えど、豊饒の神と言ふことか。成る程、美しいな」

イアヌは牙を見せ、ニヤツと笑った。

「私に触れれば、どうなるか知っておろう。よもや伝承を知らぬわけが無かるう」

バクフーンは冷や汗をかきながら、後ろに下がった。

イアヌは「くくく」と小さく笑った。

すると、バクフーンは鎖の先を引っ張った。鎖はイアヌを縛り上げている物で、イアヌは床に倒れた。

「アンタは火刑になるだろう」

「ぬし、私を思い通りに出来ると思っておらぬよの」

「気紛れで狩りの邪魔をされるのは御免だ。新しい領主が持つてきた方法のほうによっぽど安心できる」

バクフーンはイアヌに視線を合わせた。

「俺達はアンタを教会に突き出して、古い時代と決別する。アンタ

の気紛れに怯える必要もなくなるし、教会にも目を付けられていたところだ」

バクフーンはくるりと背を向けると、誰かを呼んだ。

「砂の竜に電気技が効くとなれば、これほどの証拠は無いだろ」

言い終わると同時に、三方向から電気を帯びた蜘蛛の巣のような糸がイアヌに絡まった。

バチバチと火花が散ったそれは、イアヌに悲鳴を上げさせた。

市場開放まであと少し。

バクフーンは暗く湿っている監禁部屋から、外の空気を吸うために外へ出た。

外では、二人のポケモンがボードゲームをやっている。^{チエス}

バクフーンはそれを覗き込み、「黒のクイーンは取れるな」と笑っていった。

負けそうな黒を操るポケモンは、どうすれば……。と考え始める。対する白は、「やめて下さいよ」と渋い顔で言った。

バクフーンは笑うと、それと反対側へ向かおうとした。しかし

「うわっ！ やめろ！」

先程のボードゲーム^{チエス}をしていた者の悲鳴に振り向くと、一瞬、角材が視界に入り、その場に倒れこんだ。

??

市場開放の鐘の音が聞こえた。地上では、人や物があっちこっちに乱雑して賑やかになっている頃だろう。

しかし、アスラは暗い地下に居た。しかも一人で。

イアヌ奪還の為にラドン商会と手を組み、今は合流を待っているのだ。

ピチャン。ピチャンと水滴が丸くなっている天井の石の隙間から滴り落ちてくる。

長い。アスラは時間の感覚が分からなくなってきた。

時折聞こえる、足音で大体の時間を把握する。しかし、それにも限界があった。

もしかして、失敗したのでは。

あつてはならない考えが頭を過ぎった。その時だった。

「ラッゼ」

頭の上から小さくそう聞こえた。

アスラは一瞬、何の事だか分からなかった。

「ラッゼ」

一度目より強い口調で言われたその意味をようやく理解し、緊張でカラカラの口でようやく声を出した。

「カ、カムイ」

ひと間置くと、アスラのすぐ上から光が入り込んだ。

丸い穴から、強い光が入ってくる。そこに影ができた。その影の

主は、イア又だ。

しかし、すぐに再会を喜ぶと思っていたアスラは、不意を付かれた。

イア又は一瞬その場を離れると、誰かと言葉を交わし、再び現れた。しかし、その顔はとても再会を喜んではない。寧ろ機嫌が悪そうだった。

「ぬしがそこに居ると、降りられぬ」

アスラが後ろに下がると、イア又は音も立てずに目の前に着地した。

「ほれ。ぬしの分」

それと同時に麻袋いっぱい、壺や金細工品を投げ渡した。成る程、押し込み強盗に見せかけたわけか。

「剣を」

アスラが持ってきた長い剣を手渡そうとした瞬間、イア又はその手からひったくられ鞘から少し抜き元の位置に付け直した。

何故こんなに怒っているのだろう。

イア又が奥に詰めると、アスラと一緒に馬車に乗っていたドリユウズがバシャッと音を立て地下へ降りた。

その顔は何処か嬉しそうだ。

「ぬし、行くぞ」

尋ねようとしたが、イア又の機嫌の悪さからとんでもない目に合わされそうなので止めておいた。

ドリュウズの指示で迷路のような地下空間を進んでいく。
暫く行くと、止まるよう言われた。

アスラが振り向くと、ドリュウズは頷いた。此処が約束の場所らしい。

梯子を少し上り、天井を二度叩く。

「リョーゾ」

はつきりと聞こえた合言葉に、アスラは興奮を抑えるように言った。

「ミニン」

ギイツと重い蓋がずらされ、日の光が少し入ってきた。そこは外ではなく馬車の下だった。

「アスラ様。お連れの方は」

「無事だ」

馬車に乗っていたポケモンは安堵の息を漏らすと、アスラ達を馬車に上げた。

「彼は良いのですか」

ドリュウズを地下へ残したまま馬車は出発した。
これからラドン商会の手が入っていない地下水道へ移動する。

「ええ、彼はまだやってもらう事がありますから」

隠蔽や、根回しだろう。ラドン商会の痕跡を一切残さない為だ。

「目的地まで、暫く掛かりますので、今のうちに」

休んでおけ。というわけだ。

そう言つと、彼は、御者台へ移った。

目の前には、機嫌の悪いイアヌがいる。

「え、ええと……。助かつて、良かった、じゃないか……」

言葉が切れ切れなのはイアヌがジロリと目を向けたからだ。

「何が良かったじゃ」

突然、イアヌはアスラの胸倉を掴み、持ち上げた。

足が床から離れた。

「ぬしのせいで、私はいらぬ恥を……」

イアヌは、顔を林檎より赤くし、アスラを睨んだ。

そうか、イアヌは監禁場所へやってきたドリユウズをアスラと勘違いしたらしい。そこで何かあったのだ。

ドリユウズのあの態度にも納得がいく。

「大体、ぬしは雄じゃろ！ 雄ならば牙を研いで戦に赴くのが世の常じゃ！」

ああ。納得した。

イアヌはアスラに助けに来て欲しかったのだ。

「なのに、あんな穴蔵の中におつて……」

アスラの出来ることは二つ。

一つ目は、されるがまま、イアヌの罵声を浴びつつける事。

二つ目は、慰め、関係を修復する事だ。

勿論、アスラのとるべき行動は、後者だ。

「助かって良かった」

イアヌのその時の顔は一生忘れないだろう。

一瞬、キョトンとしたが次の瞬間大粒の涙を流しはじめた。

「ぬしに慰められるようでは、私の名折れじゃ」

イアヌは、ふう。と息を吐くと反対側へ戻ると思いきや、アスラの横に腰を下ろした。

「のうぬしよ。私が捕まってた時、誰に会ったと思う」

アスラは首をかしげた。言うからにアスラも知っている人物の筈だ。だが、二人に共通する知り合いが思い当たらない。

「ナントじゃ」

アスラは床に落ちそうなくらい驚いた。

ナントは今、ヒ克蘭の蔵の中で御馳走責めになっているはずだ。こんな所にいるはずが無い。

だが、イアヌが嘘をつくとは思えない、もしかしてドイツ商会の裏についてる貴族は……

「そうか！ ラジオーネ公爵だ！」

と、なるとドイツ商会が狙っている特権は……

「関税設定権」

アスラは急いで御者にこの事を伝えた。少しは交渉を進めやすくなるはずだ。

御者は頷くと、一人が馬車から飛び降りた。

「何の騒ぎじゃ」

「この取り引きの全貌が見えたんだ！」

「ほう」

アスラは一瞬背筋が凍りついた。

話の途中で突然話を止められたのだ。悪かった機嫌は更に陰悪になってしまった。

「奴は、私を見た瞬間すぐに気が付いた。私は、悔しいがそれが嬉しかった……」

以外にも、スムーズに始まった話の裏にアスラはある意図に気が付いた。自分を助けに来なかった代わりをしろと言うわけだ。

アスラはイアヌを慰めようと彼女の身体に身を寄せてやった。

「じゃがの、奴は何と言ったと思う？」

「何だ？」

「『俺達はアンタを教会に突き出して、古い時代と決別する。アンタの気紛れに怯える必要もなくなる』じゃと。確かに初めは嫌々じやったが、だからと言って奴らの狩りが失敗するように仕向けた事はありません。むしろその逆じゃ」

アスラは、考えるのを止め、イアヌの方を見た。
目は赤くなり、頬の所々に涙の跡がある

「私は出来るだけ獲物を増やそうとしてきた。じゃが、森にも限界はありんす。時に休ませなければ枯れてしまいんす」

一方的に縛り付けておき、用が無くなったら放り出す。俺達はなんて卑劣なんだろうか。

アスラはその考えを振り払った。それでは自分もその一員という意味になってしまうではないか。

「後ろ手を引いて来ないのなら、風で砂をかけてやればいい。どの道、そうしないと村から出られなかったしな」

「言っておくがの」

「ん？」

「私は前、ぬしの前で二度泣いた。じゃがそれは暫し話をしていなかったから感情が上手く操れぬだけじゃ。つまり……」

「勘違いするな。と」

「うん」

アスラは再び溜息をついた。この竜は何処まで生意気なのだろうか。

頷いたときのイアヌの顔は笑顔だった。

そんなやり取りをしているうちに馬車は止まった。

御者台にいたポケモンが荷台へ移り、床を外す。そこに現れた石畳の一部をずらし、縄梯子を投げ入れた。

イアヌが先に飛び降りる。

「しかし、儲け話を持ち込んでくる連中は一味違うな」

御者のポケモンがアスラが行く前に言った。

「それは私のことかや」

耳の良いイアヌの声が地下水道から聞こえてきた。
御者のポケモンは、それを聞いて大声で笑った。

「俺も行商人に戻りたくなつたよ」

「それはお勧めしないぞ」

アスラはイアヌに聞こえないように祈りながら苦笑いと言った。

「あんなのを拾う羽目になる」

アスラは暗い地下水道へ降りて行った。

?? (前書き)

更新が遅れてすみません(謝)

これから、元もペースに戻ると思います。多分ですが

イアヌ「説得力のかけらも無いの」

う、五月蠅い！

??

石で囲まれた地下水道を火を点けた蠟燭を頼りに進んでいく。

途中、何匹か鼠が現れたが、イアヌが睨んだ途端、どこかへ逃げて行った。

「本当にこっちであつてゐるのかや」

イアヌは、どこまでも続きそうな地下水道に飽きてきているようだ。それに、狭い場所は好みではないらしい。そんなのは誰でもそうだ。

アスラは立ち止り、適当な窪みに地図を広げランプを近づけた。

「ああ、あつてゐる。此処を行けば街の外の草原に出るはずだ。そこなら逃げられる可能性はぐっと高くなる」

アスラはそう答え、地図をたたんだ。ピチャンと水の落ちる音以外は聞こえない。

しかし、イアヌは顔を上げた。

「ぬしよ。追っ手じゃ」

「何だつて!？」

アスラはそれを聞くと、蠟燭を吹き消し追っ手の居る方へ走り出した。

バシャバシャと水が跳ねる音が聞こえる。

「何故こっち何じゃ? 追っ手がおる」

「ここから先は一本道なんだ。さっき角があっただろ。そこから先は迷ったら出られない迷路だ」

アスラは走りながらそつとイアヌの方を見た。すると突然、イアヌは立ち止った。

「駄目じゃ。奴ら犬を放ちおった。どの道逃げられぬ。ぬしよ、何か出来ぬのか」

出来るかと言つのは技の事だ。だが生憎アスラはそんな物に興味は無かつた。

「出来るとしたら冷凍ビームくらいだ。大した威力も無い。それにそんな物が使えたら短剣なんて持っていないだろ」

「仕方ないの。一肌脱いでやるか」

そう言つと、金属が擦れる音がして気温が突然下がった。あの氷の刃だ。

「フリーズウェバー
氷結津波」

バリバリと、氷の割れるような音が聞こえたと思うと、足元にあった水が、氷の床になっていた。

「これで時間稼ぎにはなつたはずじゃ」

「その代わり、俺達の事が見つかったがな」

二人は、凍りついた曲がり角を曲がった。ちらりと、氷が続いている方を見ると、美しい氷の壁が追っ手と二人を隔てていた。

「仕方なからう。」

「まあな」

アスラは迷路の角を曲がった。

どこでどちらに曲がったかを覚えていれば、迷う事はない。それに今までの行商生活で培ってきた記憶力には自信がある。

「しかし、何故ここが見つかったんじゃろうな」

「恐らく、地上にいないから試しに入ってみたら、たまたまいました。といったところだろう……。」

「こっちだ」

アスラが曲がると同時に、地下水道の天井から光が漏れた。

「居たぞ！ あそこだ！」

「走れっ！」

アスラは、別の道へヘアヌを押し込むと、その道を走り出した。まずいな、これ以上は流石に無理だ。

汗が目に入る前に、もう一つの角を曲がった。

「しまった……」

目の前には、長方形の石が、幾重にも重なり、壁を作っていた。

行き止まりだ。

「仕方ない、引き返して、別の道を……！」

アスラが振り返ったそのとき、僅かな光とその持ち主の影が目に飛び込んだ。

とっさに、イアヌの元へ戻った。

「俺が合図したら、あそこの入り口へ飛び込め」

イアヌが小さく頷くのを確認すると、アスラは期を伺い始めた。すると、追っ手の息が乱れるのを感じた。くしゃみだ。行くとしたら、今しかない。

アスラは黙って、その様子を見ていた。

「今だ！」

追っ手がくしゃみをした瞬間、イアヌの背中を押し、自分も直ぐに続いた。

「いたぞ！」

怒号と高い笛の音を背中で聞き、もう一つの角に飛び込んだ。突然、左腕が熱くなった。それと同時に生暖かい物が腕を伝った。

「アスラ！」

イアヌの驚きの声が聞こえる。

「神よ。我が行いをお許し下さい」

相手は、アスラを殺したと思ったらしいが、実際は左腕に刺さっただけだ。

「神に許しを得るなら、日頃の行いを悔いるんだな」

冷や汗を流しながら、アスラは右腕を上げ、顔を殴ってやった。

「う……」

殴られた相手は、うめき声を上げ、倒れた。

「ハアハア……。行くぞ……」

アスラが前を向いたと同時に、影が飛び出した。同時に、悲鳴が聞こえた。

見ると、イアヌが追っ手の腕に噛み付いていた。

アスラは間髪入れずに、そいつの急所を蹴り上げてやった。

二、三日は、痛みで動けないだろう。

「下品じゃな」

「う、五月蠅い……」

アスラは傷を負った腕をかばいながら、壁伝いに歩きだした。

「こっちだ」

「ぬしよ、顔が青いが？」

アスラは、笑って答えた。

「俺が行商人なのを知っているだろう？」

そう言っで、再び歩き出す。

まずい、腕が重い……

怪我をした左腕の重みが体中に伝わっていくようだ。
アスラは、目の前が暗くなっていくのを感じた。

「ぬしよ！ 確りするんじゃ！ ぬし……」

ああ、大丈夫……だ。少し眩暈が……。
そこでアスラは睡魔に負けた。

「……しよ」

誰だ？

「ぬしよ」

誰の事だ……。

「ぬしよ！ 確りするんじゃ！」

ガクンと、身体が揺らされ、アスラは目を開けた。

そこには、暗く影のかかったイアヌが居た。

「ああ、如何した？」

「如何したじゃありません。気を失っておった」

何を言っている。

身体を動かそうとした瞬間、左腕に鋭い痛みがあった。見てみると、茶色い布が傷口に巻かれている。

「包帯か」

それを聞いたイアヌは顔を青くした。

「ぬしよ……。それにも気付かんかったのかや」

彼女の着ているローブの裾が破かれていた。そして、自分を此処まで運んできたのだ。

「ぬしよ。歩けるかや？ もう少しじゃ」

「何がだ？」

「ぬし、聞こえてなかったのかや？ 光の匂いがしんす。もう少しじゃ」

「そうか。なら、こんな所でへばってられないな」

暗い地下水道を進んでいくと、光が差し込んできた。この狩りは、獲物の勝ちだ。

??

「そんな……」

光の元にたどり着いた二人は、神のあまりの理不尽に肩を落とした。

出口だと思ったそこは、使われなくなった地下水道の天井が崩れ落ち、光が入り込んでいただけだった。

穴は小さく、イアヌが飛んで出られるようなものではない。

しかも、前は落盤で埋まっている。

「もう逃がさないぞ」

足音が近づき、追っ手が追いついた事を伝えた。

アスラはイアヌを自分の後ろへ追いやり、前に立った。

そして、遅れて姿を表したバクフーンを見て、アスラは自分が正しかったことを示す。

「人相描を見てまさかとは思ったが、本当にお前だったとは」

「ナント、この前会いに行った時、会えなかったんだぜ」

アスラは苦笑いを浮かべて、バクフーン——ナントに向かった。

「しかし、驚きだな。金目の物と言ったら、鏃やっつと針ぐらいだった筈のヒクランの者が、こんな大それた銀貨取引に手を出していたとはな」

「そう笑ってられるのも今のうちだぜ。ラドン商会はお前達を売った」

勿論、そんな事はすぐに嘘だと分かる。だが、その知識の無いイアヌはピクリと反応した。

アスラは大げさに笑って、ナントを向いた。

「ハハハ。そりゃあ高値で売れただろうな。なんせ、俺達を売ればラドン商会ミロン支店は一卷の終わりだからな」

そこまで言うと、アスラは声を低め、声音を変えた。

「俺達、商人を甘く見るな。ヴォルゾフ氏がそんな商談を受ける筈は無い」

そう、どれだけ金を積まれても、商会を裏切る形をとればそこで得られる利益を全て捨てる事と同時に、信用を失う。

あの聡明なヴォルゾフ氏がそんなことをする筈が無い。

「そうだな。仕方がない、お前の後ろにいる奴を渡せ。俺達はそいつを教会に連れて行き、古い時代と決別する」

「今更何を」

「俺達が狙っている特権は、関税設定権だ」

だからなんだと言うのだ。

「そこで俺達の毛皮の関税を取っ払う事ができる。重税で苦しんでいた俺達の村の毛皮を買ってくれた恩は忘れていない。俺とお前の

仲だ。優先的にお前に売ることできる。商人なら損得勘定ぐらい出来るだろ」

「なっ……」

関税の無い毛皮なんて、金の塊のような物。それを優先的に買い付けられたら、ミロンの街に店が出せる。

それに、それを元手に新しい商売に手を伸ばす事もできる。

アスラの夢はすぐに現実のものになるだろう。だが、

「ぬしよ……」

微かに触れている彼女の身体は、震えているのだ。

彼女を引き渡して得た夢など、重々しくて仕方が無い。

「ああ、損得勘定くらい出来るさ」

アスラはニヤリと笑って銀の短剣を抜いた。

「だがな、契約を護る事こそ良き商人の第一歩だ」

ナントは大して驚く風も見せずに、アスラを見ていた。

「何の偶然か拾ったこの娘は人を探してるそうだ。俺はその旅に伴する契約を結んだ。俺はその契約を反故にする事は出来ない」

言い終えると、ナントは落胆したように言った。

「そうか、短い仲だったな」

「行商人に別れはつき物だ」

ナントは片手を挙げ入ってきた道を戻り始めた。

「女は生け捕りにしろ。男は殺しても構わない」

ナントがそう静かに言い放つと、何人もの、武装した集団がアスラ達を囲んだ。

数は五人か。その後ろにも何人が居ると考えていいだろう。対するこっちは、右腕と短剣一本。

アスラが短剣を胸の前まで持ってきた時だった。

「……！」

突然、後ろに倒され、イアヌの足の上に寝る形になった。傷口が傷んで、身体に力が入らない。ナントが空気の変化を感じ、振り向いた。

「もう良い」

そう言うと、イアヌはアスラの腕に巻かれている包帯を取った。

「少し痛いかも知れぬが、我慢してくりゃれ」

「何を言って……」

突然、電流が走ったような痛みが体中を回った。イアヌが、傷に噛み付いたのだ。

そこから滴る血を、イアヌは舐めとっていく。ある程度、血を飲んだ彼女は、すくつと立ち上がり、アスラの前

に立った。

「ぬしよ……。目を瞑っていてくりゃれ」

その時、彼女の口には、今までに見た事も無いような鋭い牙が見えた気がした。

次の瞬間、そこには群青の鱗を持った、アスラの何倍もの大きさがある竜が居座っていた。

???
(前書き)

やっと更新できました(汗)

アスラ「遅い」

すみません(謝)

???

北では、自分達の手には負えない者を神と呼ぶらしい。

アスラはその言葉が確かな物だということを、身をもって実感した。

こんな物、どうしようもない。

そこに居たのは、群青の鱗を持った竜が、立ち塞がっていた。

その竜の吐いた息は白く、黒く縁取られた目は翡翠色だ。

鱗は触れるだけで手が切れそうで、全ての足についている四本の爪は雪の白銀のようだ。

振り下ろした尾の先には、黒っぽい毛が纏まり筆の先のようになっている。

その竜が雄叫びと同時に、翼を広げ地下水道の両壁のレンガがばらばらと音を立て崩れた。

その威圧感にその場にいた誰もが凍りついた。

そのすぐ後、アスラの目の前に鞘に収まったままの剣が落ちてきた。イアヌの持っていたあの剣だ。

アスラは、必死で這って行くと、その剣の上に覆い被さる形を取った。

こんな竜、どうしようもない。

その竜は、その数瞬後にナント達に襲い掛かった。爪で硬い岩の地面が削られている。

「ひっ」

一瞬の悲鳴が聞こえたと思うと、消えた。

竜は首を持ち上げた。そして、恐怖で固まっている一人に、顔を近づけブワツと息を吹きかけた。勿論、相手は泡を吹いて倒れた。次に左前の足を大きく上げ、すぐ近くにいたもう一人の目の前に振り下ろす。

腰を抜かしたその相手に石の雨が降りかかった。床の石が砕け散り飛び上がったものと、振動で天井の一部が崩れたのだ。

竜は頭を何度か振ると、最初に飲み込んだと思われる一人を吐き出し、起用にその横に並べた。

アスラはナントに目を向けた。

強張った足を何とか動かし出口へ向かおうとしている。まるで、俺だけは逃げられると自負しているようだ。

パキ

パラパラと石の落ちる音と、竜が首を振る音しか聞こえなかった間に、木の枝を折る音がした。

ナントは抜け落ちた天井から入り込んだ木の枝を踏んだのだ。ピクリと、竜がその翡翠色の光を放つ目を向けた。

『ぬしら、生きて出られると思うな』

竜は鼻先でナントを持ち上げると、そのまま天井に投げつけた。

ナントは一瞬止まったが、すぐに重力で床に叩きつけられた。

呻き声を上げながら体を起きあげたナントがアスラに気がついた。目で「助けてくれ」と訴えているようだったが、ナント自信が雇った傭兵に腕を刺されたアスラはまともに動く事は出来ない。そうしている内に、竜はその長く鋭い牙をむき出しにした。

「か、神は何時も理不尽だ……。何時も……」

バチン

と大きな音がして、アスラは目を背けた。

上半身が無くなったナントの姿を想像しただけで吐き気がする。数瞬して目を向けてみると、そこには竜の口にぶら下がっているナントの姿があった。

気を失っているだけのようだ。

竜はナントを床に寝かせると、ぐうんと振り返った。

アスラは、怖々とそれを見上げた。

『剣を』

突然の声にアスラはびくりと震えた。

低く響くようなその声は、つい先刻まで一緒にいた娘の声なのだ。アスラは体の下から剣を引っぱりだすと竜を見上げた。

「剣を、どうするつもりだ……」

竜は答えの代わりに、前足をアスラの目の前に置いた。

アスラは突然目の前に現れた巨大な爪に恐怖を感じ、後ずさった。

『それが、ぬしの答えか』

竜——イア又は、口で器用にアスラが置いた剣を咥えると踵を返し、出口を向かった。

アスラはそこで自分のしてしまった事の重大さを思い出した。

イア又は、神などという特別な存在に祭り上げられる事を嫌っているのだ。そして、その中で最も嫌っている物は、恐怖。

彼女は、『どんな生き物も、畏怖の眼差しで私を見つめ、特別な存在に祭り上げる。』と言った。

アスラのした事は畏怖そのものだった。

止めなければ。

そう直感した。

恐らくイア又はアスラを助けたらその足でアスラから離れるだろう。

そうなたたら二度と会う事は出来ない。

僅かの間だが金では決して手に入れられない物がそこにはあったのだ。

止めなければ。それも、アスラ自身の気持ちではなく、もっと、絶対的に逃げられないという……。

下げたアスラの目にある物が写った。これしかない。

「待て」

アスラの声にイア又は進めていた足を止めた。
振り向いてはくれない。

「お前の破いたその服。一体いくらすると思ってるんだ」

アスラの手に出来る武器は一つ。商人としての知恵だ。

「お前の稼いだ銀貨七十枚。これじゃ全然足りない。いいか、商人の恨みは谷より深く、取り立ては夜の月よりもしつこい！ 追いかけてやる！ たとえ世界の果てまで飛んで行ったって必ず見つけ出してやるからな！」

アスラは息を切らし、どうだ。とイア又を見た。

しかし、イア又はもう何も言わなくなったのを知ると、また一歩踏み出した。

アスラは失血と絶望で、視界が暗くなりその場に倒れこんだ。

???

消毒用の薬草の匂いが鼻をついた。
アスラはゆっくり目を開けた。

「お気付きになれましたか」

訊いた事のある声にアスラは体を起こそうとした。途端、鋭い痛みが全身を駆け巡った。

「ああ、そのまま結構ですよ」

「ありがとうございます」

見上げたアスラはヴォルゾフを見上げた。
彼はニコリと笑って水を差し出した。

「どうやって私を」

「我々は貴方を地下へ送り出してから、予想以上に早いドイツ商会の動きに気がつきました。そこで私の部下を送りましてね。すると、巨大な竜が貴方を護る形で居座ってるじゃありませんか」

多分、イアヌの事だ。気を失った後もずっと居てくれたのだ。

「その竜は私が行くまで貴方を渡さないと仰るものですから。私も行くまで半信半疑でしたがね」

「それで、イアヌは何処へ」

アスラは半分縫るようにヴォルゾフに詰め寄った。

「ええ、旅装を整えてくると先刻ほど前街へ」

遅かった。イアヌはもう何処かへ行つてしまっているだろう。しかし、ヴォルゾフはそんな事は知らない。

「どうかされました？」

「いえ。何でも」

ヴォルゾフは再びニコリと笑うと、綺麗に赤い紐で結ばれている紙を取り出した。

商談の結果だ。

「先に食事になされますか？」

寝起きでの食事はあまり好まれないが、ここの地方ではそれがもてなし方なのだろう。

だが、アスラは丁重にそれを断った。

今は商談の方が大切だ。

「結果は？」

「王は大きく保有量を減らすようです。さて、貴方の利益は我々の五分。相違はございませんね」

アスラは頷いた。

それを見てヴォルゾフは紙を手渡した。

それを大きく広げ目を通していく。

「え……」

まさか。

見間違いだと思いたいが、何度見ても結果は変わらなかった。

「リンド銀貨百二十枚。それが我々の得た利益の五分です」

大赤字

アスラの頭にその言葉が渦巻いた。

「王付きの商人の助言でしょう。王は銀貨を証書では無く現金で支払うと言ってきました」

現金で。

それにはかなりの金がかかる。大量の金を運ぶための荷馬車、その護衛、関税。それ以外にも数々の金がかかるのだ。

「そんな……、手数料にこんな大金をかけるなんて……」

「ええ、我々も予想外でした。ですが予想外の出来事と言うのは良い方にも起こります」

そういうと、ヴォルゾフは別の紙を開いて手渡した。

「ドイツ商会はよっぽど特権を使った商売がしたかったのでしょう。かなりの値で買い取ってくれました」

その紙には『特別報酬としてリンド銀貨千枚を贈呈する』と書き

記してあった。

「千枚も、宜しいのですか」

「ええ、安い物です。それと、アスラさんの怪我の治るまでの治療費と滞在費、荷馬車の管理費も我々が受け持ちます」

「そんなに」

「ええ、アスラさんの様な方と取引が出来るのとは比べれば安い物です」

二人は自然に笑みがこぼれた。

「失礼、支店長」

突然のノックと同時に、良く通る声が聞こえた。

「どうした」

アスラに少し会釈し、ヴォルゾフは扉へ向かった。

（支店長か……）

アスラはそれを見ながら、何時か自分もそう呼ばれたいと考えた。そうのんびりと待ちわびていたら、ヴォルゾフが振り向いた。

「アスラさん。このような物が、貴方宛に届いているのですが」

ヴォルゾフは先程届いたらしい手紙を手渡した。

「!!」

それに目を通したアスラは、傷の痛みを忘れて飛び出した。

「荷揚げ場はどっちだ」

ヴォルゾフの脇を通り抜け、手近にいた商会のポケモンに飛び掛るように聞いた。

「え……。この階段を下りて右に行けば……」

「ありがとう」

アスラは階段を落ちるような勢いで下りながら、紙の内容を反復した。

ヒゲン商会より以下の代金をアスラ・アビロート様に請求いたします。

一つ、絹の布 三枚 リンド銀貨三十枚

一つ、女性用ローブ二着 リンド銀貨八十枚

一つ、絹の腰帯 リンド銀貨六十枚

そして……

荷揚げ場に着いたアスラは、雑踏の中を走り抜け自分の馬車を探した。

そして、大量の林檎

「何時までも追いかけられたらシラギア様に申し訳ないじゃろ」

そこには御者台に座り、林檎を齧っていたイアヌが居た。

「探すのは借りを返してからじゃ」

アスラは息を切らしながら、顔を上げた。

「当たり前だろう」

そう、手を差し出した。イアヌはそれを握り返す。

後からやってきた、ヴォルゾフや、あの時のドリュウズが微笑を浮かべた。

この二人旅の物語は、まだまだ続きそうだった。

??? (後書き)

初めて、戦闘がぐつと少ない物を書きました。
が、難しいですね (汗)

戦闘の代わりに心理戦を書かなくてはいけないので (汗)
もしかしたら普通の戦闘模写のほうが簡単かもしれません (汗)

さて、アスラとイアヌの旅はまだ続きます

そして、戦闘模写はどんどん少なくなっていく筈です

それでも、見捨てないでくださいね (願)

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6499n/>

竜と行商人

2011年10月6日01時41分発行